

## 奥宮慥齋日記——明治時代の部(完)——

島 善 高

### 解題

奥宮慥齋の自筆日記は、前号に掲載した明治九年十一月二十三日までで終わっているが、本稿には、参考史料として左の三種を翻刻した。

- 一、「日光紀行」(明治九年七月十四日～同月十七日)(高知市民図書館「奥宮文庫」、受入番号五九)
- 二、「病候経過日記」(明治十年四月一日～同年五月三十日)(高知市民図書館「奥宮文庫」、受入番号五九)
- 三、「慥齋先生俗簡録」(明治七年二月十六日～明治九年九月十六日)(高知市民図書館「奥宮文庫」、受入番号四五)

一番目の「日光日記」は、慥齋が弟の正路とともに日光に旅行をした時の漢文紀行であり、二番目の「病候経過日記」は、慥齋を看

病していた嗣子正治の記録であり、三番目の「慥齋先生俗簡録」は、慥齋が、明治七年二月十六日から明治九年九月十六日までの間に、嗣子正治を始め近親知人に宛てた書翰であって、三者とも翻刻は正治の手になる。

右のうち、「慥齋先生俗簡録」には興味深い情報がいくつか鏤められている。まず、明治七年二月十六日付書翰には、佐賀の乱で大久保利通が九州に赴いた際、慥齋の門弟である北代正臣(後農商務省書記官)が随行している一文があることである。書翰には、北代の登用が土佐の林(有造)大丞の力によること、大久保が英雄であることなどが書かれている。既に拙稿でも紹介したように、慥齋は中江兆民洋行のバックアップを大久保に依頼し(「鉄舟と兆民と悟陰」と「悟陰文庫研究会編『井上毅とその周辺』木鐸社、一八九頁)、さらにこの後の明治十年、慥齋の弟奥宮正路(暁峰)が大久保内務卿の秘書

文事係となつて西南戦争中の機密通信を掌っているから（寺石正路『増訂土佐偉人伝』）、慥齋と大久保の関係は相当に深かったとみてよいであろう。

次に、明治八年七月七日付書翰では、開設されたばかりの地方官会議で土佐の中島信行が能弁を揮っている様子を描き、これまた開設直後の元老院には、門弟の田内逸雄が十四等出仕として勤めるようになったことを大喜びしている。田内の就職は「松七」が陰で働いてくれたお蔭だと書いているが、「松七」とは土佐出身の松岡七助（時敏、毅軒、欲訥）のことで、左院を経て、元老院議員となった人物である。慥齋とは旧知の間柄で、日記にもたびたびその名が



登場している。

さらに、慥齋日記では簡単にしか記されていなかった参禅の様子が、書翰中かなり詳細に記述されていることも、興味深い。すなわち、湯島麟祥院に於ける今北洪川の碧巖提唱に鳥尾小弥太も頻りに通っていること（明治八年十月一、二日付）、伊達自得や鳥尾らと両忘社を結成したこと（同年十月十五日付）、両忘社は次第に人員が増加して山岡鉄舟も加わったこと（同年十一月廿日付）、家族一統も参禅して大賑わいであること（同年十一月廿九日付）、慥齋本人よりも女中や娘の修行が進んでいること（明治九年一月九日付）、鳥尾小弥太の足が次第に遠のいていること（同年一月十日付）、中江兆民が一週間接心に詰め切ったこと（同年五月廿九日）、慥齋自身は「チト厭風」となっていること（同年六月九日付）等々である。

膨大な著作を残し、晩年には参禅に勤しんでいた慥齋も、「腸胃カタル」には勝てず、明治十年五月三十日、下谷御徒町の自邸で遂に歿した。享年六十七。墓所は、日暮里の谷中墓地。

慥齋には三男三女があり、長男正治が跡を継いで、慥齋の蔵書類を保管した。その後、正治の孫正庸は、郷土史研究に役立てるべく、昭和二十九年、慥齋関係書類一式を高知市民図書館に寄贈した。

一、日光紀行 (明治九年七月十四日、同月十七日)

余欲探日光之奇久矣、今茲明治九年丙子夏例賜告、乃與弟正路往而探之、適宮崎簡亮請伴、以七月十四日離下谷寓居、賃小車抵千住

駅、時正日出、朝氣清爽、左右青田、涼氣可掬、偶得一絕  
 夾路新秧綠欲流、小車兀々迅如舟、蹇予近日無斯興、一掬涼風似  
 早秋

路右有川、曰綾瀨、小憩、車夫云、直往粕壁、乃訂約、抵越谷停車  
 喫桃、云此辺惣宜桃、当花時、都下遊人有看桃者、午後抵粕壁駅午  
 飯、換車過杉戸抵幸手、炎威殊甚、又憩漱流水納涼、此間蕭條荒  
 村、無可紀、但見筑波黛色、出沒雲間耳、行抵利根川堤上、云近來  
 開新道、旧路橋梁、皆為廢物、亦足以見沿革變態、細沙炎塵襲人、  
 然對刀川汪洋、布帆數点如畫、稍強人意、午後五時半達栗橋投宿、  
 州号紀、疲憊殊甚、無復詩歌、予謂二子、暑中賜告人、各遊近傍、余  
 輩冒熱奔數百里外、好奇亦甚矣、三人相視呵々大笑、然遂莫逆于心  
 也、浴後早呼枕、已有客況

十五日、罕晴、早發栗橋、渡刀祢川、煙靄一帶、遠近糲糊、吾儕亦  
 為画中點景、過中田駅、行松間大道直如髮、行里餘曰茶屋新田、路  
 右有碑、入讀則十九夜講也、皆絕倒、抵古河駅、賃車行、猶穿松  
 原、野木駅、路左有野木社、祭宇治若郎子、史稱郎子讓位仁德自  
 殺、實逼此云、此畔小丘、矮松雜木、大抵皆同、無可紀、友沼乙女  
 小村落也、問々田駅亦蕭條、問々田小山之間為上下野境、午飯小山

駅店、憩小金井、抵雀宮又息、午後五時投宇都宮駅、宿手塚某、是  
 為駅中第一等、浴後散策市街、是駅戊辰役、大半係兵燹、今復昔、  
 夜暑甚、登屋上乾物棚納涼、過雨一霎、眠不知

十六日、夜來有雨、頗爽然、早發此駅、々端賃車行、足指稍仰、行  
 松尽處、接老杉夾路蔚葱、涼氣可憩、過野沢、小憩德次郎駅、亦山  
 間小駅也、過老杉間、經小池山口抵大津駅、憩駅端、微雨至、涼風  
 襲人、雲煙籠山、近山不可見、午飯今市、食香魚甚美、午後二時、  
 至日光鉢石街、投小西喜一郎、直雇鄉導詣東照宮三代廟、金碧宏壯  
 輪奐、實眩人目、鄉導頗說其緣起、故讓口碑不復記、雖記筆非可  
 及、降詣二荒神社、々傍有半祀神殿、云既毀而見止、歸途過滿願  
 寺、假山水非無風致、而對真山水設此假山殆可厭耳、晚浴後傾一盞  
 眠樓上、樓對山後溪、水淙々洗俗塵、真仙境也  
 夜潦雨滌然膚生粟、急把外套着

飽餐煙霞洗俗腸、官情家政兩相忘、欲知換骨仙家訣、只今連旬遊  
 日光

十七日、晴早起理裝、欲觀中禪湖、路經青龍寺觀音、憩堂中、又憩  
 馬返村喫飯、度溪流、處々架小梁、自此稍々坂路、忽路右見一山、  
 削壁忽欲墜頭上者、衆絕叫曰奇哉々々、披麻折帶諸魔法、莫具具、  
 而諦視之則中腹有一大洞穴、傳云是為風穴、昔從此生大風、損禾  
 稼、空海鎮之、其事極誕難信、蓋從此風致頓別、若人神境、泉石磊  
 砢翻雲雷、對面言語不聆、溪尽而登々峻絕揮汗衆皆苦、適有行客數

人、相話而登、且登且憩、連半腹稍平夷處見二瀑、曰方等磐若、佇立良久、又登十町許、有華嚴瀑布、乃入、路左數丁、遙聆々々響、對瀑設一柴屋惹客、云是瀑長百五十間、幅稱之、但以遙望、且不見瀑源為憾、宮崎生乃攀樹根岩角降數十武、礼弟從之、予亦不能恣然、乃援樹枝降、下瞰其底、見小禽翱翔、石燕、脚酸不可久視、復故處、忽遇一老人負琴來搜、問之、云越中人、號曰李角、好画嗜琴、顧余輩欲與同（以下闕）

二、病候經過日記（明治十年四月一日）

病候經過日記

明治十年四月一日奥宮正由病氣

兒 正治 識

四月一日 晴

午前八時頃兼テ疝ノ氣味アルニ付、淺草福井ヲシテ胸腹ニ數十鍼ヲ下ス、平常ト違ヒ響キ強クアリタリ、九時頃ヨリ頻リニ惡寒ス、午後ニ掛ケ熱度強シ、五時比杉田來診腸胃熱ノ初起ナリト云フ、投スルニ「ミンテレーセイ」ノ水劑并ニ「トーベルス」ノ丸藥ヲ以テス、同七時半身湯ヲ行フ、発汗隨分アリ、小便頻數ナリ

同二日 晴

病候依然脈搏九十四五度アリ、身体衰弱食慾進マズ、口中頻ニ乾キ

アリ、舌苔微ニ茶色ヲ帶フ、午後五時杉田モ來診

同三日 晴

病候依然熱退カス、午後四時桐原ノ弟子來診、云腸胃カタル熱ノ初起ナルカト云フ、先ツ杉田ト同見立ナリ、水劑二日分ヲ貰フ、同時杉田モ亦來診、夜少ク下痢ス、時々頭部ヲ冷ヤス

同四日 晴

熱度少ク減ス、「キニイネ」ヲ用ユ

同五日 晴

午前一時近火アリ、大ニ驚愕、少シク腦ニ交感ヲ起シ、頭痛アリ、頻ニ冷却ス

同六日

熱度稍減少ニ似タリ、然レトモ身体衰弱甚シ、杉田來診

同七日

病候依然、熱度稍減少

同八日 晴

朝熱度大ニ減少ノ處、又少々惡寒アリ、午後熱又少ク發ス、朝牛乳ヲ飲ミ忽チ下痢ス、以後不用之

同九日 晴

朝七時頃迄ハ大ニ快キヲ覚ユ、八時前ヨリ悪寒アリ、十時比ヨリ頻リニ疝拘攣、痛ヲ発シ、心下痞拘苦惱甚タシ、二時頃杉田ヲ呼ヒ「モルヒネ」ヲ心下ニ注射ス、劇痛ハ之ヨリ少ク止ム、然レトモ拘攣甚シク身体ヲ動ス可ラス、此日脈搏百十五(寒暖計四 十度三分)ナリ、此ハ全ク疝痛ノ刺衝ニヨリ発セシモノニテ兼テ感冒熱ニアラサルニ似タリ ○食欲絶テナシ、朝粥一椀ヲ喫スルノミ、終夜煩悶快寐セズ、身体益疲憊セリ、「モルヒネ」水剤ヲ飲ミ、キニイネハ見合ス

同十日 大風沙ヲ吹ク

病候依然、心下拘攣解ケス、然レトモ痛ハ発セズ、午前九時杉田来診、蜂蜜灌腸ヲ行フ、心下ニ黒キ「パップ」ヲ貼ス ○食欲ナシ、オモ湯ノミヲ飲ム ○熱度稍退ク、脈搏九十五位、舌苔ハケ赤クナル、口中乾キハ甚タシ、小便頻數、大便少シク下痢ヲ起ス ○午後七時比ヨリ頻リニ下痢、終夜六度、衰弱甚シク、大便ハ泡ノ如キモノヲ下ス、甚タハイナシ、小便茶色ヲ帶ブ

同十一日 晴

午前五時ニ至リ下痢未タ止マス、宝丹神薬ヲ用ユ、七時ヨリ下痢止ム ○食欲少クアリ、午前粥杯ニ二ツヲ喫ス、正午オモ湯二杯ヲ飲ム、二時比「ソツプ」ヲ飲ム ○午前九時安積友成ヲ迎ヘ診察セシム、投ズルニ緩和水利并止痢ノ「ホミカエクス」丸薬ヲ以テス、然レトモ「ホミカエクス」ハ一度用ヒシノミ ○午後五時杉田来診、

云フ餘リ収斂劑ハ良カラズ、緩和劑然ルヘシト云フ、又コム水ヲ用

ユル事ヲ云フ (コム一匁ヲ水二千四匁ニ入レ微温湯ニテ溶解) ○熱度減少、脈搏八十位、終日能ク睡眠 ○夜九時十分前脈度八十 ○小用六度位黄色ヲ帶ブ ○ソツプ (牛肉上等六十匁ヲ水四合ニ入レ一合五匁ニ煎ス、右二日前中重厚ト唱フ)

同十二日 晴

熱度稍減、午後杉田安積兩人来診 ○口中乾依然脈度七十九拍 ○午後六時頃(下痢)通 ○強発泡ヲ右ノ心下肝部ニ貼ス 午後七時 二十分前

同十三日 晴

午前四時(ヤワラカ)通、午前発泡ヲハル、頗ル強クカ、ル ○熱度稍減、疲労甚シ ○脈搏八十拍計 ○オモ湯少々飲ム ○口中乾依然 ○小用常ノ通 (量甚タ少シ)

同十四日 曇 微雨

疲労益甚シ ○午前七時比ヨリ睡眠、睡汗アリ、額并胸部ニ出ル、発泡ノ水腫痛ム ○微ニ悪寒アリ、熱度少ク出ル八十八拍 ○午後二時杉田来診、五時安積来診 ○玉子「ブランドー」ヲ用ユル事ヲ云フ (金マサカリ印「ブランドー」四「タラ」  
△「雉子黄」一匁、熱血凡ソ二「オンス」) 右一日ニ用ユ、但度數ヲ不限 ○「ブランドー」ヲ杯ニ二ツ飲ム(夜七時)、微醉能ク眠ル ○此日大用通ナシ、小用晝夜七八度少量 ○夜十二時水薬ヲ飲ム

同十五日 曇

午前脈度七十二拍、昨夜少ク快然タリ ○口中乾燥少クユルム、頻リニ氷ヲ喫ス ○「ブランヂー」二度 ○午後六時、十三日午前四時大用通シタルノミニシテ少ク胸ニツカヘル氣味アリ、灌腸ヲ行フ、大用通シアリ、黒色ベタ／＼ ○「ソツプ」少々ヲ飲ム、オモ湯二椀ヲ一度ニ飲ム ○午後六時卅分脈度八十二拍

同十六日

病候依然

同十七日

病候少ク快然

同十八日、十九日、二十日

少ク快然、時々灌腸ヲ為ス

同廿二日

病候依然、午後六時又々拘攣痛ヲ發ス ○大用通ズ

同廿三日

午前五時下痢一度、夜ニ入り下痢二度 ○熱少ク出ル、疲労甚シ

同廿四日

脈搏八十五六度 ○舌苔微ニ白苔ヲ帶フ

同廿五日 陰

午前脈搏九十度、舌苔白ヲ帶フ ○午前五時下痢一度 ○午前九時卅分前安積來診、云熱度増加甚タ不容易、藥方ヲ改ム「ホミカ」ヲ用ユ 丸藥水藥 十二時比ヨリ飲ム ○食欲甚タ悪シク、水藥「ソウブ」ト雖トモ飲下ヤ否直ニ通氣ヲ催スニ付、オモ湯薇ノ粉少々ヲ食ス、腹時々痛ム（痛氣ニアラス、通氣ヲ痛也） 肝部氣味甚タ悪シ ○午後二時大用通ス、下痢ナリ、小用晝夜六七度、黄茶色ヲ帶フ ○午後四時卅分淺草橋病院長牧山脩卿來診、云フ胃「カタル」ニアラズ、拘攣痛ニアラス、「チブス」熱ニアラス、先經過ノ徵候ヲ見レバ肝臟掀衝ニ似タリ、尤モ檢尿ノ方用ヒサレハ慥ニ判定シ難シト云ヘリ、明日安積ト篤ト申シ談シ、藥方ヲ定ムベシト ○寒暖計ノ百一度ノ熱アリ（五時） ○午後異状ナシ、夜中下痢ナシ ○夜中快寢少ナシ

同廿六日 微雨

午前三時下痢一度アリ、同午後一時一度アリ（終始通氣ハアレトモ、コラヘル氣味ニテ如此） ○午後二時三十分安積來診ス、熱度九十度（常溫六十二度ヨリ三分ヲ過ク） 脈搏八十二付、愈肝臟掀衝ノ徵候ヲ得タリト云フ、依テ前日ノ藥方ヲ改メ「ラウダ」水劑ヲ投ス ○食味昨日ノ通りナレトモ少ク味アルカ如シ、朝粥二盞、晝晚同シ「ソツプ」一度 ○小用昼三度 ○午後八時十五分脈度八十拍 ○快寢ス、終夜下痢ナシ、十時ヨリ小用一度ナリ、夜半ノ小用ハ多量

同廿七日 雨風アリ、温暖氣候不良

午前十時脈度七十五拍 ○心氣少ク快キヲ覺フ ○食味少クアルカ  
ノ如シ、朝粥二盞 ○午前十時迄下痢ナシ ○午前小用二度アリ、  
少量 ○昼二盞ヲ食ス ○午後七時七十四拍 ○舌苔白色ヲ帶フ  
○午後六時卅分粥三盞ヲ喫ス、少ク味ヨシ ○口中微ニ乾燥アリ  
○八十四度（午後七時） ○右脇ノ筋骨下左程痛ヲ覺ヘス ○肝部  
ニ「テレヒン」油ヲ摩擦ス ○時々氷ヲ用ユル良シ ○夜中フクラ  
スイク煩悶ス

同廿八日 晴風

午前先快然ヲ覺フ ○下痢ナシ ○食欲少アリ ○朝飯粥三盞、昼  
粥三盞 ○午後三時四十分牧山先生來診、云フ熱度微ニ減ス、肝部  
疼痛減ス ○便秘ス（廿六日午後一時  
アリタルノミ）

同廿九日 晴昨日ノ如ク 快然タラス

午前七時三十分少々下痢ス ○午後三時十五分脈度八十四度 ○安  
積來診 ○舌苔白色ナシ微ニ乾燥ス ○午後五時水ニテ肝部ヲ冷ス  
○午後六時過ヨリ八時迄眠ル ○食味依然三盞ヲ食ス

同三十日 晴

午前九時脈度八十七、舌苔ナシ、口中乾燥ス ○小用極少量 ○食  
欲依然、朝三盞昼同斷 ○午後脈度八十九、熱発ノ様子ナリ ○正  
午十二時蒲公英根蒲公英幾斯等方ニ変シタル水薬ヲ飲ム ○午後四

時過肝部微ニ疼痛ヲ発ス、暫時ニシテ止ム ○晚食三杯 ○口中乾  
燥アリ、舌苔赤ク剥ケル ○夜ハ快眠少ナシ、一昨日ニ比スレハ快  
然タラス

五月一日 陰鬱風アリ

午前八時脈度八十九、舌苔赤ク剥ケ、乾燥アリ ○朝猪口ニ二杯  
○午前六時通氣ヲ催シ、雪隠ニ行キタレトモ不通、放屁ノミ ○今  
日心氣快然タラス、熱度昨日ヨリ微ニアルカ如シ ○小用午前六時  
一度多量ニアリ、午前九時十二分小用アリ、少量也 ○正午十二時  
脈度九十五熱発ス ○終夜煩悶ノ氣味アリ ○去月廿六日午後一時  
大用通シ、同廿九日極少ク通スルヲ以テ蜂蜜ノ灌腸ヲ行フ、四時半  
大用通ス

同二日 陰

午後五時牧山來診、温度百度六分 ○口中乾燥アリ ○昨夜ヨリ小  
用通度々アリ、昼間五度、量ハ極テ少ナシ ○安積來診、肝部発泡  
膏ヲ貼ス（午後八時） ○此夜快寝アリ、夜一時大用自然ニ通ス  
○食味至テ少ナシ、朝ハ猪口ニ二杯、昼晩二杯半 ○午後七時半發  
泡膏ヲ張ル、三日ニ至リ功ヲ奏セス

同三日 半晴

朝六時卅分脈搏八十九、同午前九時三十分比ヨリ脈搏九十八度 ○  
此日ヨリ薬ノ處方ヲ変ス、水劑并丸薬ニ藥也 ○午前十一時昨夜ノ

発泡ヲ取ルニ薬力ナク、少モ水泡ヲ起サス ○口中頻リニ乾燥 ○午後八時再ヒ発泡膏ヲ貼ス ○同八時大便通ス、煤色ヲ帶ブ、ベタ

同四日

朝七時発泡ヲ取ル、微ニ水泡ヲ起ス ○午後一時卅分前安積来診、脈搏九十四、温度百一度五分 ○同時又発泡ヲ貼ス、午後七時之ヲ取ル、○午後六時大用通ス、煤色ベタく ○食欲ナシ

同五日 雨

正午後二時安積来診、脈搏九十四、温度百一度四分二厘 ○午前九時大用通ス ○午後四時牧山先生来診、温度百一度四分 ○食欲ナシ、晩半熟ノ雞卵ヲ喫ス ○口中頻乾燥 ○夜快寐

同六日 晴

午前二時大用通ス ○舌苔微ニ白色ヲ帶フ ○食欲寡少、半熟ノ鶏卵ヲ食ス ○午後一時前大用通ス、初メ水瀉

同七日 晴

午前六時大用通ス ○同九時又大用通ス、極テ少量ナリ ○此日稍清快脈搏八十三 ○雞卵半熟、雞「ソツプ」ヲ食ス

同八日 晴

午前五時大用通ス、小用昼間七八度計アリ、但少量、夜間四度多量 ○朝粥二杯、玉子一ツ、昼片栗「ソツプ」、晩玉子、片栗 ○午後三時三十分安積診察、脈搏八十八、温度百一度五分 ○口中乾燥 ○夕方手足タルキヲ覺フ

同九日 晴

朝オモ湯二杯玉子一ツ、晝オモ湯、玉子「ソツプ」 ○朝七時大用通ス、午後牧山先生来診 ○晩オモ湯「ソツプ」玉子一ツヲ喫ス

同十日 晴

先昨日ノ通り、午前七時大用通ス

同十一日 晴

午前八時安積来診、脈搏八十八 ○食欲昨日ヨリ絶テナシ、オモ湯玉子「ソツプ」ノ料ハ同様 ○午後十一時過キ心下微ニ疼痛アレトモ暫時ニシテ止ム ○同時昨日ヨリ大用通セサルニ付灌腸ス、立所ニ大用通ス、カタマリ沢山通ス、少々黄色

同十二日 晴

午前脈搏九十六 ○朝「カタクリ」湯二杯 ○午後二時前下痢ス ○昨日ヨリ食欲絶テナシ、然レトモ「ソツプ」少許玉子等ヲ喫ス ○夜煩悶快寝スル不能



同十三日 晴夜雨

午前七時安積来診、脈搏八十八、温度常度ヲ越ヘス ○朝オモ湯ヲ喫ス、十時玉子ヲ喫ス、食欲昨日ノ通り ○午後七時下痢アリ、昼夜小用八度

同十四日

正午十二時下痢アリ ○食欲昨日ノ如シ、朝「ソップ」昼王子ヲ喫ス ○午後一時過ぎ安井先生来診、云フ慢性腸胃「カタル」ノ末期ナリ、別ニ薬方ヲ與ヘズ、午後四時過牧山先生来診、云熱ハ減シタリト ○同七時粥一ヒヲ喫ス、忽チ嘔氣アリ

同十五日 雨

病候依然衰弱益甚シ、重厚「ソップ」少ヲ飲ム、午後六時三十分水少許ヲ飲ム、忽嘔氣アリテ黄色ノ貼液用ノモノヲ吐ス ○同九時下利ス、泡状ノ沾液ナリ、同夜二時又下利ス ○夜十一時「ソップ」少許ヲ喫ス

同十六日

病候依然タリ

同十七日

同断

同十八日、十九日、廿日、廿一日

同廿二日

微ニ快然タルヲ覺フ、大便堅ク下痢ノ氣味止ム

同廿三日 晴

病候依然タリ

同廿四日 晴

病候同様、午前八時牧山来診

同廿五日

病候依然衰弱愈甚シ、時々「ミルク」ヲ用フ

同廿六日

病候同様下利ナシ、食欲益々減ス

同廿七日 晴

病候依然、食欲前日ニ比スレハ大ニ減シ、「ミルク」八勺許ヲ飲ムノミニシテ衰弱愈加リ危篤ナリ、夜ニ入快寝少ナシ、大便正午十二時一行、午後三時安積氏来診

同廿八日 晴

朝八時脈搏百二十、四五日前ヨリ大概同様ナリ ○正午十二時大便

一行アリ、同午後四時又一行、少々下痢ノ氣味ナリ ○食欲絶テナシ、「ミルク」昨日ニ比スレハ又少許ニ減ス、衰弱殆ント不堪、午後二至テハ脈拍百三十、殆ンド數ヘ難シ、手足微ニ水腫ノ兆ヲ現ス  
○夜十一時安積來診、其俣泊ス ○終夜快寝セス

同廿九日 晴

病候益々危篤ニ陥ル ○午前六時大便一行、同午後一時下利ス ○咽喉外部へ少粒ノ水泡状ヲ為シタル者ヲ出タス ○人參湯ヲ飲ス  
○午後三時山川友益來診 ○終夜呻吟、危篤甚シ

同三十日 晴

午前五時安積氏來診、脈搏微細數フ可ラス ○同六時大便少許ヲ通ス、小用多量ヲ通ス ○食欲絶テナシ、微ニ牛乳ヲ飲ム ○八時牧山來診 ○九時ヨリ病候一層危篤ヲ加フ、頻ニ呻吟、然ルニ煩悶スルニ至ラズ ○十二時呻吟ノ声止ム、其時心應所操ノ四語ヲ唱フ  
○同三十分睡ル如ク絶息、絶テ煩悶ノ状ナク、二便ノ透出モナク、清々淨々トシテ逝去セリ、嗚呼悲哉

### 三、慥齋先生俗簡録

○ 「朱書」〔明治七年二月十六日付〕

本月十四日癸之書翌十五日達、致被閱候、春寒料峭之處、愈無事勉職珍重不過之候、爰元我等始皆々依然瓦完罷在候、左様御安心可致候、一月廿二日本月三日兩度之書も相達候由、致安堵候、潮江分も得書信皆々無事之由、又々安産女子之よし、母子とも肥立と云、弟東遊も聊疑慮支泥し居候趣、頻ニ勸メ遣候、如何か決策するや六かしかるべくと察候 ○都下も先靜謐、十四日ニハ大久保内務卿始外六七名西征、北代生も隨行、十日招飲、林大丞其餘數人會、大ニ面白、竟ニ一宿徹夜談論セリ、近來忠告中々人物を上ケ非舊阿蒙候、此度之事ハ偏二尹が擔当力ニよると存候、流石之大久保先生も為之動クト云々、感心く、依而大久保卿之英雄をも聞知いたし候、必可有功、其後電報、宮崎縣ハ已ニ鎮定之よし、佐賀ハ未タ也、雖然半過ハ虚声虚喝ト云、扱潮江書生<sup>命九</sup>捕逮之件も落成ニ及候由聞へ候、岩公未出仕無之、固リ近日必出らるべしと云、征韓党ノ外封縣党攘夷党條理論党ト分レ、中ニ條理党ハ上京言事ノ勢アリ、故ニ其未發ニ乘シ壓倒スル策ト云々、薩公ハ全ク中外独立ト云々、十四日ニハ旧臣ヲ召集何カ事ヲ議スルト云、薩分出候人々皆午後分引キ帰り候、未詳何事定而故アルヘシ、佐賀縣ハチト面倒ナルヘシト想像、併シ暫時ニ鎮撫ニ至ルヘシ、固リ兵力ヲ用ユルニハ不至シテ鎮定アルヘシト存候、如何々々 ○西姪<sup>本育</sup>十二日文部省十二等出仕ニ出身大ニ喜居候、第四大区学之督学局江出候、伴修カ周旋存外ニ高等

二出大笑口得意極マリ、チト可笑候、毎日内々出朝いつも八時過早勤ウゲ返り候、中尾捨吉途ニテ伴修ニ逢、誰ソ人ハナキヤト云、折柄捨吉西姪ヲ拳ケ三四日中ニ運ビ候よし也、亦奇妙ト云ヘシ、後之ものに福アリトハ此謂也、呵々、其方身前も蒲生氏大ニ引受居候へとも、急ニハ六かしき由、佐々木大輔へハ未得行近日行ヘシト存候、尹モ中く此度之一獄ニ大ニ世話敷よし也、正治なども外省へ轉候事かいかぬものかと存候、文省などは至而閑ニ而且盛大之勢アリ、予も亦意なきにあらず、内務は如何大久保歸り候へハ北忠江申込可申か、如何々々 ○家禄返上も未決定、何卒衆評宜ニ隨度候、西姪ナドハイカント云、貸金モ面倒也ト云、如何、山林ハどふも六かしかるべし、追々桑茶之地面付之家へ移り度、此家も家主又々地代ヲ坪四分之處ヲ八分ニ上ケ度ト云々、決而イカヌ相談故、近隣出井トモ不承知之段、木村迄理ル積ニ候故、どふで賣拂度元ノ轄へ入レハ宜かと存候、如何々々、西上町辺ニ好貸屋有之候よし也、当分又々貸屋へ入居候へハ今之困窮ヲイノギ可申候ガ、実ハいろく入費多ク、来月金後取続キ兼候、憐察可然候、少ニ而モ贈金、如何々々 ○二豚児も何分不勉強只入費のみ、故ニ健吉ハ退塾が宜かと存候、尹もどこぞ等外にても入候策ハなきかと存候 ○お鶴森本木造分もらい度と八束分声カ、リ居候、如何、随分よき處と存候、聞合セも入ましく、併妾か今居否ヲ詳ニ仕度候 ○國事未嫁スル策も不付、此間中ハお万寿名弘メトヤラニ而五六日中橋へ遣候、追々策付可申候、今ニテハ金之入費ハ一銭不出来、故ニ先扣居候、書到此紙尽、勿々不一

二月十六日朝十時

正治との

髓翁

皆々

○ [朱書] (明治七年四月廿三日付)

本月十一日書相達忝披見、其後十三日西森分之上封書も同様、春光爛然之候先以御揃愈無事、珍重々々、一家中同様何々安慰いたし候、爰元一同依然瓦完罷在候、御省意可被下候、花候もいつしか残花と相成、風光狼藉满地香雪爛珊墨陀芝街双鏡上野飛鳥日々遊人如織、東台ハ日々車塵馬埃いつも晚醉散步いたし候、十七八日東照宮賽日、大賑古寺ニ而古書畫展覽會有之、父子見物山口大鳥田蕃根同僚も出會、半日古書畫中ニ暮候、実ニ皆稀世之宝物、就中呉道子佛畫、金岡雪舟之大達磨ナド目ヲ驚申候、其餘古英雄豪傑書如見其人殊ニ逸勢道風空海菅公嵯峨帝など之書晋唐名家にも不塊と申事也、但憾不與俱展觀耳、如何々々、五月一日今旧聖堂ニ而博覽會ニ又々出よし、凡珍奇物二百五十餘品其餘ハ不足数也 ○扱我等事又々第四大学区巡回被仰付、今月中ニ出発ト申事未調中ニ候、四大区中愛媛有之、其節事ニ寄り一寸六月比令同々帰省可致かとも存候、未必事故姉君等必御待兼と存候ニ付、碓トハ不申上候、先八月比帰京ト申事同僚與予六人六区へ分派巡回いたし候、四大区ハ予引受也、健吉ヲ拉可申と存居候、暮春之客中尤適意、去夏ハ中絶、去春ハ東京ノ花を得不見、今年ハ東京花候を過

昨日芝今日隅田川飛鳥山 花咲ころそいとなかりける

きのふけふ都の花を見尽して 松の魚まつ故郷の空

例の筆下即吟、御笑評く ○西森分先便船二何よりの木綿編贈致、  
 健二落掌忝謝入候、御序二宜一同分も申出候、真太郎姪益々揚々、  
 折々議論有之、尤可喜く、しかしはや白チリメンノ引すたき帯な  
 どちと洒落過くとなふり申候 ○江藤之詩歌御示し忝候、新聞など  
 へも憚テ不出か可笑く ○縣学岩田某参り候よし、学校ハ益可盛  
 板垣氏など学校之世話有之候よし、旧城公園春遊、如何々々、縣下  
 へハ此度同僚尾越オコシラスケ蕃輔也と中山口人巡回也、尹ハ随分伶俐口才ア  
 リ、事ニ寄御接遇如何、先任ハ澄川是も伶俐漢也 ○いろく話緒  
 紛々ニ候へとも、何やら取まきれ先擱筆、匆々不宣  
 四月廿三日午前八時半

健翁

正治

豚犬等

存齋弟

庵姪

諸姪

西森へ別書不出、宜御傳致可被下候、政治も先日は横濱学校人減ニ  
 而止り其俣居候、トカク又々官途ニ付可申候、随分盛なる様子也

○ [朱書] (明治七年五月十三日付)

十一日午前九時過靈巖出船本船十時二着横濱ハ同夜八時出發、夜稍穩、翌十二日  
 午前六時頃分風雨遠洋大涛立一船皆注意アリ、健吉殊甚予不甚困、

同夜終夜大動船此余未揺、午後九時比已ニ入大島ノ議アリ、然トモ直馳、

翌十三日午前九時神戸着、海岸通吉川屋ニ投、同午後三時岡山行川  
 蒸汽江乗筈也、軼江着、小田迄陸五里ト云、大惱々々 ○健吉縣廳  
 へ届後ニテ宜候可届出候 ○其余ハ不用意ナカラ先忘物もなく候、  
 大急忙中如此、追而山陰辺より佳信可申候、決而懸念無用く大壯  
 健也

五月十三日午後一時楠社分帰直ニ

健翁

健吉

正治殿

皆々へ

尚健之あしらひ可申候

○ [朱書] (明治七年五月廿三日付)

小田縣分一書申遣候、逐日暖和之處、一家皆平安可有之喜慰不過之  
 候、爰元我等健吉とも瓦全此迄罷越候、左様安心懸念有まじく候、  
 拟神戸分之一書定而着可致と察候、十一日二日遠洋之風雨は実ニひ  
 どく、其比分風と腰痛を發し、終日終夜ユラレ窮屈ナル處ニ兩懸ケ  
 を置、僅カニ三尺計ノ處へ鞠躬如弓、而モ首へ時々兩懸ケ轉カ、リ  
 其窮困云計ナシ、健ハ臥ナカラ吐散ラシ大弱リ、余ハ其中例ノ小便  
 頻繁殆ント困却ス、十二日夜九時比ハ船中一同大ニ騒キ、大島へ入  
 レト云議起ル、船主モ其議アリ、然トモ実ハ不動様子也、竟ニ港  
 ニ入レス、時ニ困眠不知曉ニ至テ甚穩也、必入港ト思フ、何因既ニ

紀灘二入、其朝十三日八時半比神戸二近ツク、九時着、人々初テ平安ヲ賀ス、余モ一度小便ニ行吐ス、然トモ不甚、只頭零々タリ、神戸旅店吉川屋楼上ニ暫休、浴後散歩、川蒸汽和合丸舟子来云、午後二時発シ軻津へ行ト、即約ス、惣して五円半外二端舟等ニテ六円也、而待トモ不来、拉健児詣楠社、結構云計なし、鉄道ハ既成テ未發行、近日必発スト云々、其夜八時比稍大坂より川蒸汽来即乗ル、稍穩也、夜中風ナク前日ト異也、十四日風逆潮不便甚遅シ、一度多度津へ着、金比羅参リヲ卸シ、夫々軻へ着、夜八時過港上ノ逆旅ニ投ス、小田吏来行人ヲ檢ス、云佐賀殘党ノ故也ト ○十五日微雨、買舟渡、小田縣六里計、此迄類ニ舟行、健吉大メリ也、然トモ馴テ不酔、風逆潮不便甚遅ク、晚稍小田ニ達ス、大形屋ト云ニ投ス、縣へ届など出、十六日ハ休故十七日出頭ト云、此夜少々腰痛、按摩ヲ雇ヒ擦且鍼ス、素人無功、其翌市中ヲ散歩ス、小聚落旧ハ笠岡ト云天領地也、稍開化セリ、大ナル製絲場アリ、学校ナドハ尤盛也、中教院モ可也被行由、比日僧侶二名来訪、大形勢ヲ聞、翌十七日腰痛不已、力メテ縣ニ出令、参事ニ接ス、云社寺縣吏ヲ旅宿へ遣シタリト、直ニ辞婦、姑シテ権中属杉山毛利松島史生来晤、此度之旨趣ヲ談ズ、毛利ハ米沢人、嘗在大学正治ト同塾ト云々、嘗記否好人物也、杉山ハ俗吏事務家也、隨分教義ハ張込由 ○十八日午後一時中教院ニ而神官僧侶ヲ會シ、黒住派ヲ六名試験ス、地方官モ立會、皆農民固陋不可言、先木村壽太ノ如シ、力疾従事、終日殆困却、晚五時返寓、逆旅ヲ換へ槌屋源次郎ト云ニ移シ、離坐敷二ツノ内一ヲ借ル、稍佳也、然トモ賄ハ甚麗也、一人十五錢ト其筈也、按摩ヲ呼療

せしむ、疝ノ腰痛筋ノ事也ト思フ、然ニ山陰山險跋涉前途猶遙也、故ニ医ヲ延療セシム、三村某ト云、云「レオマチ」ナリト、即塗藥一ピン散劑五帖ヲ與へ去、初ハ左今ハ右ニ轉ス、筋ノ事ト思へド、ヤハリ「レオマチ」なるべし、立居屈伸ニ甚艱ム、立テ歩行スルハサマデノ事ナシ、猶兼井ノ如シ、実ニ困却、然レトモ何ノ氣合ニ掛ル事モナク平氣ナリ、医モ四五日スレハ必治スヘシト云々、廿五六日ハ此ヲ立度思フ也、決而氣遣無用也、委シク云ハサレハ却而懸念アルヘシト存故ニ詳言ス、高ハ始終力疾、三丁余ノ中教院江往来出頭スルヲ以可知也、併シ客中困却ハ実ニ困却也、知其情ハ兼井ナリ、但氣遣ハ無用、亦「レオマチ」ヲ憎ヘシ、健之如何此節出学カ、廿日亦教院ニ有事、廿一日ハ休、終日休眠不出、廿二日又教院試験半日、今日日中ハ休、夜説教ニ出勤之筈也、毎日浴後小散策、二二三丁ハ出来ル、書到此紙尽、不宣々々

五月廿三日午前九時半晴和好天氣

欲遠歩慨然

健齋

健吉

正治殿

皆々との

○存外入費多シ、然トモ宿ハ甚安シ、鯛サハラ澤山ト云、折々喰フ、新筈既ニアリ、松魚ハナシ、故山ノ子規松魚ヲ想ニ堪ヘス

此頃の山ほと、きす初松魚 思へハ近き土左の海山

白髮山ハ遙カニ遠黛ノ如ク見ユト云

立よりていさくらへ見む白髪山 我佛といつれ増ると  
遠州洋にて

老の浪よるも忘れて遠つ近江 七十の灘をまたも過けり  
上野飛鳥山を思ひやりて

きのふけふ上野飛鳥の山櫻 青葉のかけと立かはるらむ

此より北條縣へ行筈也、途中吉備津宮ニ立寄くれよと云、かの名た  
ゝる鳴竈を思ひて

音にきくきひの鳴かまよしあしの 便りにつけて思ひこそやれ  
○内の賄如何、二百十円を何卒働かし候手段なきや、居て遣へは山  
も崩る、

居なからに遣へは水の滴さへ 川となるみの海に入るらん

例の筆下即吟、咲評くく

若シ返書ヲ越ハ廿六日比ヨリ北條へ行筈ナレハ、此書付次第直ニ北  
條縣カ又鳥取縣へ出スヘシ、北條へハ今月下旬今来月へ係ル也、い  
つれも縣廳ヲ宛テ出セハヨシ

○ [朱書] (明治七年七月七日付)

雲州島根縣分一書申遣候、溽暑之候一家皆々無事ニ可有之、珍  
重々々、我等始健吉依然瓦完罷在候、少もく懸念有ましく候、藝州  
廣島已來絶而家書なし、如何、山口へ来候かと存候へとも無其儀、  
定而例之懶惰かと存候、家内中如何、健之此節夏やみ如何、兼井持  
疾等起りも不致哉と存候、我等此節ハ極々息災風邪ニも不感健吉も  
同様、石国險阻中を跋陟、余程かたまり申候、実に石見ハ巖邑聞し

に勝り候、山口今陸多雨ニ而溪水暴漲、又萩江廻り船ヲ求處順風な  
し、又陸海岸を取り漸七日計ニ石州濱田へ着、途中艱難不可言、又  
話種ニ而候、或ハ山間ニ投宿、又乞宿漁家など余程珍らしく三十年  
来無此風味、頃日杵築以來ハ好逆旅ニ高枕手拍子ニ候、今日偶無事  
即裁、此書中ニ例之神官僧侶突入、実ニ可厭候、此縣を何卒五六日  
ニ為濟、因州鳥取へ此中旬ニ参り、北條江廻り、今月下旬今来月に  
かけ愛媛江参り度、さすれば八月中旬には故國へ入可申と胸算いた  
し候、如何々々、返書ハ愛媛縣<sup>22</sup>カ又故郷かへ越し可申、鳥取北條な  
ど却而間違ニ可相成と存候 ○清水生如何、早所を得せしむるにし  
かず ○健之学校如何、例之此比又懶惰ニ可相成、如何々々、勉強  
可然候 ○健吉も随分懶眠勝ニ而ぐずくいたし候、併少ハ氣が利  
キ出来候、随分旅ハうきもの、よろしく候、決而氣遣無用也、匆々  
不乙々々

七年七月七日一昨五日夜松江ニ着、杵築屋楼上臨湖處

健翁

健吉

正治殿

皆々との

餘程入費も有之候故、内之三月分ヲ必残し可申候、世上如何、新聞  
近日絶テ不見、僅ニ今日六月廿六日今二三日ヲ見ル、台湾モチト六  
かしキよし、如何々々

六月一日、在廣島、柳行李ノ両掛ヲ買五兩餘、雨森精翁旧姓尾礎三郎、ト云有名人類  
二来訪、談話面白シ、此二而ハ隨分繁華、日々散歩市中  
同八日、夜舟ニ而巖嶋へ渡ル筈、廣島本川橋下ノ篷窓ニ宿ス  
同九日、煙雨中ヲ航ス、如畫裏行島峙無數、晚巖嶋祠下ニ達、投阿  
波屋逆旅、晚祠ニ詣、宏壯可驚、千疊敷五重塔絶奇、豊公ノ大度可  
想

同十日、雨、巖嶋ノ宝物ヲ展觀ス、古器古書畫不可盡述、同夜発  
舟、岩国新港迄行

同十一日、新港今又同舟ニテ三田尻迄行、錦帯橋ヲ不見、可憾

同十二日、在舟晚三田尻ニ着

同十三日、小車ニテ山口へ行

同十四日、暑、在山口地方官神僧等数人來訪、権令モ好人物、近藤  
芳樹來訪、老人之高名家也、菓子多クモラフ、健兒皆啖之、カステ  
イラねり羊羹ニテ腹ハルト云々、おステナド羨想スヘシ

同廿一日、発山口、人々送別、世良利貞山迄一里計送來ル

同廿二日、在萩求舟欲航濱田、風逆

同廿三日、発萩陸路濱田ニ行、山路危険、日暮テ惣合ト云山間ニ  
宿、副戸長家也、幡郡ノ深山ノ如シ、殆桃源也、此間山路艱難筆ニ  
盡難シ、帰後付西窓、夜雨話耳、萩分七日ブリニ濱田ニ達ス、在濱  
田三日、権令佐藤勘作好人一日招款

同卅日、雨、發濱田温泉津ユノツニ宿ス、類ニ浴ス、名湯也

七月二日、在川合官舎、一寺ニテ神僧ヲ會シ、例ノ示諭了テ発ス、  
波根ニ宿

同三日、舟ニテ杵築大社ニ行、曉起載舟

おもひきや身ハ老鶴の飛倦て

羽ねの浦はの月を見むとは

同四日、在杵築サスガ大社ノ光ニテ繁華也、宿モヨシ、中一日泊ル  
同五日、夜舟松江ニ着、投島根本町杵築屋楼上

同六日、微雨、終日無事、休暇

同七日、風雨、所謂梅雨ノハヘト云氣色ナリ

○ 「朱書」〔明治七年八月十九日付〕

従高知一書付郵便候、残炎如燒候へども皆々無事依然相暮候由、珍  
重々々、爰元我等今月十二日松山出足、同行二人木村庸、健吉、是日夕雷  
雨、久万町ニ宿、同十三日、途中今俄ニ策を決し高山通り川口泊り  
といたし、用居へは廻らす、山中路狭隘、薄萱原宿駕籠数々落シ、  
遂ニ山中ニ而日暮、極難渋一步モ不可歩、松明を製せんとすれとも  
雨ニ湿り枯竹モナシ、且火不付、マツチ不用意、遂ニ洋紙日記を付  
木にして火を点し、暗中を摸索して行一里許、辻堂水ヶ崎ノ大師堂ト云悪所也ニ野  
宿、人足とも都合八人也、同十四日、黎明ニ飢疲を忍て川口ニ至  
る、白雲谷を埋め海の如し、辻堂ハ峠也、下ること凡三里半達川  
口、夫分舟を買、かの名高き急流を下る、兩岸奇壁千丈叫絶奇景先  
第一と存候、険は蜀峽ニ比すへし、無限人間快意事不如清曉下流舟  
ノ句あり、折柄谷麟吉台湾より帰るニ逢、同舟台話を直聞、甚面  
白、佐川迄ハ早く夫分ちと遅く、晚方伊野へ着、店ニ而晚餐人力車  
不來、只有駕馬ト云、即四人皆乘、夜行暗中、且往來人馬多ク馬屢

驚、殆欲墮、岸切ニ而舎馬、長繩手分車ニ而江ノ口へ着、夜半也、大ニ驚喜迎、久米猪かと思ひ候よし也、夫今日々いろくいそがしく、布師田へも一昨日参り、昨朝帰り、いろく取調筆筒ニ而廻可申かと思居候、機道具ハ小道具丈、木綿車ハ一ツ取帰可申候、皆さしづ雛形にいたし候積也、潮江弟も是非く同行を勧め居候へども、根ハ起六かしく、いつれ同行可致、先今月末之蒸氣と存候、一昨<sup>十七日</sup>平安丸着、西姪未采、必後船ニいたし候哉、大待兼二候、如何くくく ○夏休暇三十日遊蕩ニ費可申、ちと省略可致候、芝の一見之由面白可有之、函嶺入湯ハ如何、必思止るへし、扱かの月給今八月分渡候哉、何卒ちと引残可申候、存外旅中入費多ク、内ノヲアテニいたし帰申候、一家中へも夫々相應ニ土宜贈候、健吉ハ兼而策決之通り先止り、師範学ニ入一修行致積也、是にも入費有之候、潮江弟参り候へハ幸ニ留守を頼ト申居候、外ニ旅宿有之候ハ、折く参り見繕積ニいたし置候 ○存外世話敷一日も安居午睡等難出来候、布師田へも今一度参り、荷こしらへ可致と存候、我等此節稍老健、然トモ暑ニハ大めりニ而奔走も不致候、潮江露臺随分涼しく、先七八日中ハソチコチに而清光、決而別ニ旅宿ハいか、と被止候、先日一日新地ニ而松山人を饗シ候、随分賑々敷、芝も夜か始、因テ未見候、いづれ近日帰京剪燭西窓話ニ付可申候、匆々不乙々々

〔朱書〕 廿日二延

八月十九日<sup>午前十一時是日も炎威如昨九十三度也</sup>

〔朱書〕 十九日夜新地芝の見物不面白也

正治殿

皆々との

尚々留守よくく用心盗大流行之よし、脚氣ハ如何、御国もチクく有之候よし、高爽地を求る策、如何く

〔朱書〕 真太郎未着多分月末かと存候

潮江江ノ口掛川町等江松山縞一反ニ金子二三圓添贈申候、布師田へも少々金子遣候、直兵衛見舞ハ半円ニ品遣候、其丈内へハ何も得調不申候、只々平安二字を土宜といたし候

唐人町川原夜少々賑敷、されども大ニ衰此中之様ニ無之候、新地も不景氣也、上町ニモ子供芝るアリ、先夜芝る前を過申候

一米中く高ク諸人困り居候、一石ニ付二十三四両計いたし候、中く六かしき世の中也

支那話かまびすし、板垣氏を訪不在、其餘書生ニ逢立志社之話承申候、大競也、都下如何、弥支那ト戦ヲ決候よし如何々々、片時も帰京致度、いづれ廿八九日比ハ乗船と存候

反故古本ナド筆筒へツメ込取帰積也

○ 〔朱書〕 (明治八年七月七日付)

録川其日参り餞別書箋恵まれ候、礼書可遣候也

本月二日之書同七日午時相逢反覆致披見候、溽暑多雨、先以本月一日午後四時海上無恙着崎、当分旧縣用達岸川喜八郎方ニ止宿之よし、清も存外注病なく無異に参候よし致安堵候、扱一度出勤いたし

慥齋

健吉



随分静閑之由、處々見物可致候、爰元我等始皆々瓦全罷在候間、少も懸念有ましく候、中沢五軒町ノ十五番トヤツ二も御成小路へ借家無事ニ暮候よし、先日お鶴参り、今日健吉参り、彼四両も贈随分事足候よし、決而懸念有ましく候 ○都下先依旧其中地方會議大分盛ニ相成候、過日傍聴ニ参り、午後三時過迄居大ニ面白覚候、多分日誌等廻り一見と相略申候、議論稍實際ニ臨かけ候へども先空論多ク、併シ晴勝負芝居見物などより遙に相樂候、トカク稠人中ニ而恥ヲさらさねば真実ハ出不申もの也、能く此行實際を試可申候、何事もゴマカシニ而ハイケザル也、中島信行随分能辯シ候、併シ口先キも多キ様存候、渡辺昇氣魄漢也、但缺精細か楠本楨村亦可也 ○一昨日元老院開院式臨御先一開申候、其後ハ如何、未可知也 ○田内も廿八日二元老院江十四等ニ出仕大喜ひニ而候、日々出頭ノよし、松七が働具候様存候、其餘数く過日同院江出仕有之、向後盛大なるべし ○健吉もどふぞ何方へなりとも祿仕為致度、併シ無藝者故殆困却、細川か松七かへ近日頼可申候 ○廣田生薩分帰り直ニ参り先楼上江滞留、頻ニ薩話聞面白存候、東京ニテハ更ニ実地ナク、客中か大ニ着力有之ト申候、西郷ニ落膽実ニ亦感心也、二月餘在留ニ而稍彼縣下事情ヲ悉候よし、イロく珍話有之筆紙ニ難尽、先當時留置候積也 ○謙之も共憤ニ而稍勉強、然ニ入費ニ不堪、先月分など殆囊底を拂候、彼正金へも手を着僅ニ廿円計也、月給迄いろくして取続度候、チト此行ハ考可申候 ○清届中沢もいたし候哉、五十日過候へハ届可致、健吉委細申越呉候様申居候 ○休暇も先後「門+亀」取ニ而、予ハ八月十日分向々を取暑中出勤之筈也、併シ此節稍息災相喜

候 ○兼井も兼而修行ニ四日分籠未帰、六日計滞留ト申事必可宜と

存候 ○崎陽品物騰貴のよし、早く好借宅いたし、自炊ニテモいたし、省費之工面可致候、今日ハ匆匆々期後便候、不乙々々

七月七日午後六時

健齋

豚犬等

正治殿

お清との

尚く皆々よりよろしく申出候

○ 「朱書」(明治八年七月十二日付)

谷生帰省ニ付一書候、炎威逐日之處掛街姉君始皆々御無異、幸甚々々、爰元老朽始一同依然瓦完罷在候、御安意可被下候、昨日ハ弘田生ヲ拉博覽館江出縣、序ニ岩崎生一訪久振暫話、尹頻ニ吾弟来遊ヲ勸メ、是非決策乘秋涼一遊可致、其上ニ而決而空手帰郷ニハ不致と申居候、何卒急ニ決定二十日計遊ト思ひ蒸船ニ托可申候、切ニ相勸メ候、休暇中を幸ニシテ偶然可成くく丁野生も切角申居候よし也、十二等已上ハ受合申候

○地方會議も段々博取、今日ハ田内参り傍聴民會を議し候よし、大ニ精神憤起之よし、考朽も又々十八日比人之代理ヲ望傍聴可致相樂申候、暑中休暇も八月十日分「門+亀」当ニ而、秋涼ニ乘し近傍山水探申度、函嶺か熱海浴湯も可宜かと存候、相與曳杖聯袖を期し候、如何々々 ○博覽館も段々出品増シ実ニ驚奇、弘田生農学ニ志アリ頻ニ植物ヲ穿サクス、予ハ餘り不看、古器物可愛多シ、例之

慕古癖出、一笑く

○観劇ハ吾弟ト俱ニすへしと未島原ヲ伺不申、秋劇ニハ屹度驚目と存候、如何々々

○諸生四五輩之為メニ講莊、其間ニ姚江書を望出候もの有之、先靖乱録を講候、チト姚江ニ志候もの出来かしと存候、呵々 ○実事神道彼吉見本実ニ面白ク出<sup>書カ</sup>拔デモ致度候へども不及、いづれ為寫置か省江も五部計ハ買上ケニ相成候、弥南邸氏為寫積ナレハ、チト字料か、り候、幾等テモ宜トナラハ先何ぞ為寫試ニさし下シ可申候、春得江御尋可有之候

○布山故郷之梨味思ひ出候、アノ穂を接木ニスルニハ大根へさし船便ニ越し候へハ十分出来可申候、家地とも六十円ナレハ拂可被下候、それヲ旅費ニテ思ひ切発軔、可然く

○正治も本月一日着崎之信アリ、随分閑散之よし也、二子亦碌々謙之ハ先在塾、健吉ハ在宅、皆無志ニハ込入申候、併頃日兼ニ被勸稍発憤也、書到此日已没蚊多ク擱筆候、匆々不宣  
七月十二日午後六時晚齋

髓翁

豚犬等

存齋弟

諸姪中

尚々皆々へ宜愚家分も申出候、今便何ぞ遣し度候へとも、テンニ不合残念く

七夕燈 浅草會探題

今宵より七夕妻<sup>ツメ</sup>に契おきて

か、りや添む老のとほし火

翻刻注…後ろから二行目「妻」のルビは朱書

○ 「朱書」(明治八年七月廿三日付)

本月十日細書同廿日相達忝致披閱候、炎威烈々之處益壮実勉強之由、珍重々々、爰元老朽始一同無異瓦完罷在候、左様安意可然候、本月四日分筑後町木村伴次郎方ニ宿借居候由、一人前三円半、自炊ナレハ壹円半之よし、来月より自炊之積之よし可然候、諸品高價併魚類ハ随分廉ナルよし、菜園類高價云々、内ニ而ハ茄子木瓜沢山ニ候、旅宿眺望宜よし、老拙先年之宿ハ差支有之よし其側ト云、避暑ニハ最好處唐寺遊訪如何、善應老衲へ傳致可致候、尹ハ老実可依人物ニ候、扱当夏暑氣最甚シク、田内ナトハ矮屋旁殆ント百度ヲ越候事有之、内ハ風入ハ宜候へとも九十三四度ニ至り候、出省も存外統キ、まだ今月一度も引不申候、昨日ハ宿直十二時迄不能眠、今日ハ午睡也 ○何かチト洵々之物情之よし、朝鮮もブスく、廣津帰京話無之、崎陽テハ早モ何カ事カ始ると申由新聞ニ見候、如何々々、左府公一昨日か参内ト云々、未詳、彼建白被用候ニヤ、又一騒然と杞憂いたし候、本省等先いろく之濁脇ニ而却而風當無之よし、鈴木足達ナト少丞ニ進級八木七等ニ成候、○中くまだ四人程首かあり六かしくと存候 ○潮江分も一昨日信書皆々平安、礼弟事により乗秋涼東遊と申越候、相樂候、当年ハ避暑無術折々同僚ナドニ被誘

福井町の浴場位ニ而却而倍暑

いつこにか暑避むとさきはくより 心のとけく居るそ涼しき

納涼ニ出懸ルホド暑キモノハナク、須坐火爐頭上之公案想ヤラレ候、来月十日ハ休暇、其中日光ヘテモ一遊いたし度、避暑遊山旁と存候て好伴ヲ扨居候へども未得、健吉ヲ拉可申敷、併留守ニ込可申謙之も折々参候、随分勉強と相見へ候、折々督責可致候

○中沢も今之宿甚あしくどこぞかへ度よし、先日十六日月明旁母子お参り、一酌一絃久振ニ而一興いたし候、日々とふもあらぬ由ニ而来月分ニ円先貸いたし候、併随分暮ハ付候様子也、決而氣遣無用○小島生も等外ニ出候よし甚好々、先日親父参候、少年能氣ヲ付督責勉強スヘシ、遊治郎ニナラヌ様意見可然、やはり同居か詳示すべし、書到此白汗流水ノ如シ、擱毫、匆々不乙々々

七月廿三日午前十時炎威如酷吏

榎翁

豚犬

児収殿

清女との

尚々家禄奉還願潮江ハ先日郵便ニ付候よし、近日済来ヘシ、金請取可申候、其アトノ處三宅カ来ラハ相談スヘキかと存居候、如何々々、後便可申越候

○ [朱書] (明治八年八月十日付)

一書付郵便候、残炎霖陰之候無異ニ奉職可致、珍重々々、爰元老朽

始皆々碌々瓦全罷在候間省念可然候、客月廿日比十日出之書相違候後、惣而信書不来、例之兼井杯大ニ懸念いたし候、此方之書もとく着可申、其返書未来、大抵時々之返書ハ二三日中ニ認可差越、遠隔之地旁皆々不堪勞心候、如何之訳ニ有之候哉、例之惰氣敷、又休暇中いづれへか遊候か、如何々々、当年暑実ニ烈敷、先月廿八九日ハ殆百度ヲ超候處有之、其後本月三日比ハ俄頃ニ冷氣如深秋ニ至り頻ニ不正、頃来ハ暴雨洪水打続、ちといやな時候ニ候、其地如何、三百里も隔り候へハ余程違可有之詳示スヘシ、於潮江一家中も無異、時々却而得書信候、田内氏も不相替日勤、存外繁多之由、お鶴も時々参り候 ○於中沢も同様、不相替時々仲御徒町へハ参よし、今月も彼贈物遣し候、とかく轉宅の思わく有之、いろく世話いたし居候へども未相應無之よし、ちと困り居候よし也、併シ何も氣遣ハ無之候、お清如何、定而氣遣可申候、時々書状可差越候、小島生も等外ニ出候よし、日勤勉強と存候、随分氣ヲ付可遣若キものニ候へハ、花柳出来心有之候もの也 ○省中も先依然明日ハ休暇之廻りニ而、今日ハ是非出勤と存候處、頃日微恙チト痛痛、今日風雨旁無據引申候、惣而之世上風聞も不聞候へとも、何分チト洵々と申事也、如何々々、朝鮮一件其地ニ而ハ如何、燈下暗ノ諺ノ如クナルヘシ、大隈氏の征韓ニ荷擔と申事一驚愕也、併敗家之餅策か、呵々、其餘チクク聞候へとも、不能筆語候、新聞記者もヒドキ事く頻ニ西將軍再出などと巷説也、復結髪礼服改ルナド云々、可想像々々、併杞憂ハ今此時かと存候 ○奉還一條も未何等之沙汰もなく止るかも不可知、三宅氏先日来残金九月迄延期ヲ約候、甚不融通云々、小

川モ息男参り今十五日迄延期ヲ約候、金策中ノ六かしく相成候よし、此冬ハ如何ノ。○弘田生も先日帰省いたし候、尹も目途違候や、又々出京トハ申居候、田中生も先日一寸帰京、四五日ニ而帰縣、等外三等ニ出仕大ニ困却、併し大憤発ニ候、仕途も中ノ六かしく、健吉など何分等外ニてもと望居候へとも、無藝者故不可奈何、潮江弟十月比ハ一遊と申居候、未可知也、岩崎生受合と云々○兼井も豫而望居候禊社ニ入修行大ニ心地快然、何ヤラ一旦豁然若有之、類ニ修行ニ参り他ヲ勸メ居申候、亦可謂奇哉○崎陽休暇中ハ如何消遣候や、骨董店も冷弄ノミニ而ハ面白、チト何ぞ快活事有之や、人物訪尋如何、読書如何、唐寺ハ毎々遊候哉、善應和尚へ遇候ハ、致声可致候○新聞も東京不評ニ付、又々朝野へ替へ候處是も不面白候、何分鉗口之策罰金が大コタへと存候、順廻しニヤラレ候よし、可恐可笑、書到此紙尽、擱筆、匆々不乙々々

八月十日 頃日暴雨豊川暴漲内外水高  
しト云、邸内ハ其患なし

健翁

豚犬等

正治殿

お清との

尚々不正時候切ニ自愛養生可致候、飲食尤大事也、我等本月三四日比分チト瀉下、三四日ニ而止リ、アト疝痛是も一朝切、爾後グズノ不正故ト存候、二三日快霽ニ候へハ必可快と存候、決而氣遣なし、故ニ詳示ス也、謙之依然折々参り候、試験か有ると申居候、健吉ハ弘小路辺江算学に通学いたし居候、今度ハお鶴ハ御無沙汰と申

居候、再白

○

〔朱書〕(明治八年八月十九日付)

田内お鶴も状ヲ出ト云中例之因循不及今日便候、昨日ハ高橋安彦勸メニ而禊社へ田内夫婦兼井杯参り説教ヲ聞、大ニ感服之様子、田内も大ニ信居候、暑又々一兩日ヒドク相成、殆九十三四度ニ上り候、崎陽如何、切ニ撰生可致候

十九日書添

客月廿九日認本月四日発之書同十五日朝達反復致披閱候、炎残未去之處、其元共皆々無異之趣幸甚々々、爰元老朽始皆々依然瓦完罷在候間、少も懸念有間敷候、頃来も潮江ノ信書皆々依旧無事之よし、中沢留守も無事、一兩日前も仲御徒町迄参り候よし、未夕相應之借家も無之、併田内近隣ニ一家有之勸メ居候よし也、決而懸念有ましく候、扱老朽も本月初頃分時候傷ニ候處、六七日頃より瘡ニ相成、三振目ニ幾那塩ニ而截見事落候へども、跡復常いたし兼今ニグスノいたし、休暇中空消遣遺憾ニ不堪候、聊脚氣之気味ニ而歩行難ク、勿論服薬小豆など喰居候、決而氣遣なし、田中生も脚氣ニ而先日帰京、寄寓格別之事も無之、福島ハ辞帰候よし、尻の居らぬにハ困タものニ候、其地炎威中ノ難堪由、脚氣ハ如何、俄之冷雨分處方脚氣多きよし用心撰養專一二候、健吉謙之等も依然懶生、兼井ハ類に立花邸江修行、大分心疾を忘懸ケ近隣などへ勤ニ行、河口氏等稍安心ニ候、類ニ他ヲ勸進、お鶴などへ強進いたし候、一種の捷徑方かと存候、四五日誦戒中ニ何か一旦悔悟有之よし、愚夫愚婦ニハ

無此上奇術と存候 ○聖福寺善應老衲へ逢候よし、渠西遊支那直話可面白、不堪羨殺候、禪ヲ被勸候よし、何も一樂事客中之慰ニ叩底問究可然候、老衲ハ随分一悟處可有之、渠か得處位ヲ勘破、一棒を喫スルカ喫サスルカ二ツツ二唐突可致、如何々々、畫法を誰やらに学居候よし、亦佳々々、例之骨董店如何、玉か廉價トカ例之玩癖可生想像ニ不堪候、書畫類奇品有之候ハ、見てもらい、調可申候、素人鑑識ハ必被欺もの也、用心く、暑中休日近傍ハ遊可致存候處ニ堅ニ被妨、残念く、崎港近傍ハ奇山水可多先年得不探、何卒其元代遊可然、島原雲仙岳辺如何々々 ○村山生先日一訪、何か司法もの拔萃借有之よし、寫本物と云、次便ニ可申越、何も内には無之様覚候

○小川弘淵も十五日延期相談、即先日持参皆消、又高橋保造も同様ニ而借呉候様相談、先断置候、いつれ又々直ニ来ル筈、三ヶ月位なれば慥ナ請人次第二而借可申敷とも思ひ候、如何、保造ハ只今北洲社ニ而廿五円之株と申事チト覚束なく候、三宅も九月限と申事其跡ハいかゞいたし候や、段々世上不融通之よし、已二三井も閉字と評あり、政府に波及セネバヨイガ、呵々 ○奉還ハ今以沙汰なし、如何、成事やら其手江聞合候へとも不明 ○中沢氏も借家ニ困却、例ノ月配ヲ三ヶ月分程先借ニ而敷金付之借家<sup>トカ</sup>有之よし考中ニ而候、孰レどふとも世話可致遺積ニ候間、氣遣申間敷候 ○炊婢も十五日ニ而替ル約束十六七之者二代、やはり花之徒弟女と申事随分物静ナル実貞者也、静も随分仕立物など類にいたし居候、トカク是も他江縁付積り之よし、最初々其筈と存候、勿論来年迄ハ居筈也

○先今ニテハ内も静平也、諸事も随分省約ニ参り候、併老拙養生ハ十分ニいたし、肉食ソツプ等ハ不絶様いたし候 ○中島座大當りと申評一町目も同断、チト涼ニ乘し一見と存候、書到此報晚餐、擱筆、匆々不宣

八月既望後一中秋月色奇明、例ノ二階ニテ田内等會シ一興セリ

慥翁

豚犬等

正治殿  
お清との 時々書状忝、返事期後便候、  
尚々時候替り自愛専心也

今日中沢氏分別紙参り候ニ付書添候

残災難堪候處御無異珍重々々、爰元老朽始瓦全消光省慮可然候、頃日脚氣風處今日比大分快、大ニ通利ニ相成候、歩行ハ一二丁位散歩、日中暑甚敷、更ニ往來難出来候、殆九十三四度ニ至り候、崎陽辺如何、切ニ撰養可然候 ○昨十八日亀戸之禊社先生會アリテ高橋安彦参り、田内夫婦并ニ兼井同伴参り、日晡後帰り、皆々大ニ氣受宣、田内も随分信仰之様子、トカク入社かと被察候、安彦近来大ニ信者ニ成り類二人を勧メ入、遂ニ及老迂、近日出懸筈也、亦一興なるべしと存候 ○中沢氏不相替息災也、決而氣遣申間敷候、家もどふか有か、り候よし也 ○都下先格別之事なし、暑中休暇ニ而、諸官員類ニ遊山いたし候、村山生も温泉行之由、前日一訪暫話いたし候、本月末比今近傍遊歩可致と相樂居候 ○田中生も今二何之見込

もなくグズツキ居申候、類ニ法律学ヲハ研究いたし候。○兼井ハ類ニ祿社江通修行ニ參候、其故か少々癩症治奇代也、近隣ノ高橋お中分被誘先大ニ安堵いたし候、チト風類ニ近き修行ナレトモ、亦一向専念之妙處有之候、近日一試可致と存候。○暑中看書も懶ク、新聞ハ東京ヲヤメ朝野ニいたし候、規則後いづれも不面白相成候、併末廣生ハキツキ漢ニ而大そふ評判也、必從此民権説被行可申候、政府返照ハ此一事と存候、呵々、新聞中諸論文一覽可致候、尤面白キもアリ、大抵御ハチガ廻り合セ、柳北ナドモ詰問サレ候よし、大騒ぐ。○劇場も近日一丁目始まり候よし、中島座大当り、大郎かさね早替也、妙々々

○中秋月色奇明佳會アリヤ否都下定而佳會アルヘシ、蒲生一昨日過訪民法撮要とか云もの、序文被示候。○今日正木昇之助被訪暫話、元老院人書到此擱筆、不乙々々

八月十九日

健翁

正治殿

お清との

○ [朱書] (明治八年十月一、二日付)

九月十八日之細書同廿九日達嬉しく披閱致候、秋氣稍爛然燈火可親読書好時節、愈平安勉勵之よし、喜慰々々、爰元老朽始昏々依然瓦完罷在候間、少も懸念有ましく候、陳者秋霧打統一日半日晴も少く崎陽如何、下筑後町寓ヲ轉興膳町大田と申候大工家江越し候よし、

自炊之便ニハ宜由、小島生も近日別居可致云々尤よし、同僚ト法律書輪読夜會ヲ建立、稍発憤と存候、何卒続ケかして祈申候、一個之演舌會ニよれば珍重福沢氏ニ不劣様可致、呵呵。○朝鮮一件一昨日比合類風聞、崎陽江逃帰候電報ト云々、嚙く騒然想像ニ不堪候、就而ハ枉韓党大競之よし、都下も好事家は其話計也、追々詳報可有之候、崎陽ニ説あらは可申越候、所謂潰序之餅、大騒々々。○本月分非常儉約ヲ始、家政ヲ改革シ、定額金月ニ二十八円ニ而日用諸費ヲ仕伏セ、勿論臨時や必須物ハ此限ニあらず、今朝今屹度一同盟約、謙之も退塾為致答也、未識能行否潮江弟来答も、此度之韓地一件ニ而どふなるやらヤマラネバヨイガと存候。○池原大處ト云一大家有之よし聞夕様にも覚候、直話勘破如何、歌ハ宜よし便ニ可示、崎陽ニハ存外皇学家多し、猶伊勢ニ漢学家あるかとし、亦一奇也、禪寺遊方ハ如何、我等近來類ニ永興寺洪川於湯島麟祥院碧巖提唱有之、通聽一六朝也、甚面白從來見解トハチト違有之候、近日參叩鳥尾小弥太も類ニハリ込通学也、今朝も冒大雨參堂ス、和尚中く活機三昧、詩も隨分面白書も佳也、先日席上示鳥尾生、和洪川示鳥生韵證去證未猶未確、如同蚊子咬牛角、問君一滴洪川水、寢耳入未覚不覚

以為如何鳥尾生意氣聊一棒ヲ下試候、何やら即次韵せしかと忘了、高橋安彦も折く參り候、龜戸へハ其後不行、該社も亦面白覚。○池月生昨晚偶然來話、云九月廿日出獄云々、不相替強情我慢、併少しく後悔氣ナキニ非ス、予ニ就テ学ハント乞、予未全許孰レ近日ト辞去、韓地一件ニ又々逆上セネバ宜がと懸念いたし候。○村山木郎

書拔書近日付郵便可申候、併シ量目五十匁計豊岡縣迄ハ余程運賃入可申候、亦迷惑也 ○健吉も司法之試験ヘデモ出度ト頻ニ申居候へとも、中く六かしく岩崎氏も随分世話可有候へとも、當年中之事とも不存候、何ぞ存付は無之哉、崎陽辺ニ好機會ハナキヤ、如何々々、小島ヲ世話スレハ私ヲモト云々、併シ家政一委任人ニ候へは遠方ハ不宜、都下ニ而何卒ドコゾヘ入申度思グレニ候 ○老後之思出ニ參禪且育英を志シ候、同志ナキヲ歎息ス、洪川社中一二アルノミ、田内も頻ニ内會ヘハ出懸候へとも、中く鈍機難入困入候、阿鶴も子宮症大ニ宜敷、先日帰り居候、氣遣無用也、お清世帯如何、隙アラハ何そ女子之職掌ヲ為学可申候、浮氣ヲ去ルヲ肝要トス、注意く

○中沢も先日出帆後ハ便なし、併必首尾能着可致、森生隨行渠ハ必崎陽へも行へし、油断スルヘカラス、小島ニ味シメ等外デも望積と勘破ス、如何々々、書到此殆暮、擱筆、匆々不乙々々

十月一日 午後七時  
前雨蕭然

慥翁

豚犬等

正治殿 お清との

尚々不正氣候切ニ自養專一也、盜火用心、次之都下小盜益多シ、困窮ハ一日く二切迫之様子也、氣之毒ナモノナリ

書添今朝ハ新霽秋氣可掬、崎陽如何、韓地話此節定而喧々たるべし、後便必詳報可致候、都下ハ政府大秘と相見、未御布告も無之、餘り知人なく候、孰れ近日米穀なども騰貴に至り可申候、益不融通

と察候 ○先便之郵便局へ送致之四円も早速受取申候、三宅ハ実ハ高知人武田信恭ニ而、来一月迄延期申出、兩人先日注願ニ付、先それニ約定併月俸ニ而月二十円ツ、拂込筈也、未奉還金も不渡、もし渡候ヘハ公債證書を買か宜と申事也、如何々々、世上金融益困却と存候、省略随分可致也 ○田内も家を賣当分二階へ同居為致候積なれども、例之因循グズく困却いたし候、潮江掛川町田内と同居二なれば余程多人数に相成、随分やかましかるべくと存候、家政改革も先被行候様子也 ○村山へも郵便ニさし送可申健之へ申付置候、匆々不宜

十月二日朝

慥翁

みなく

正治殿

お清との

○ [朱書] (明治八年十月十五日付)

一書付郵便候、冷氣遂日之處其元等愈無事勉勵致候由、幸甚々々、爰元老朽始皆々瓦完罷在候間、少も懸念致間敷候、扱本月五日潮江之書信有之處、懸川町之姉君客月廿日過分時候傷ニ而熱不食之處、廿六日比合差重り、終ニ本月四日御病死之よし訃音参り、実に驚嘆絶言語候、天涯地角殊ニ老後之我等不堪悲痛、客月卅日之信書ニ粗御容体も申參候へとも、必後便吉兆ニ而、是非今度ハ潮江弟同伴可致と屈指相樂居候處、右之通誠ニ存懸もなき事ニ候、右ニ付香資金不取敢贈致、先書ニ布山家五十円余なれば買拂候様申遣、其中ニ而

十金餘ハ姉君江猷之候積リナレトモ、未賣候ハ、とさし贈候、今朝  
 今蒙忌ニ而、届書出し引籠候、其方にも聞忌、当日今十日ハ引可申  
 候、併又其半減ニ而、五日引可申と存候、それに付弟ノ東遊も如何  
 相成哉、当月末今来月中旬へ懸ケ何卒思立候様勸メ遣候

○我等も近来ハ随分健康には候へども、何を申ても六旬有五之老  
 翁、兄弟不仕合ニも逢候へば、甚落力来春ハ何卒東京へ帰省之策目  
 論見可申候、尚歳晚ニハ尾崎氏江通書可致と相合居候、それ迄ニ其  
 下地こしらへ置可申候、同志懇意ニ依頼可然候 ○政府辺も餘程六  
 かしき風評征韓も内患ニ顧慮之様子、金ハ益窮し候様子、諸省定  
 額減シ位テモ中々イケヌ事か、華族開議江臨幸も新聞ニ所謂水心  
 魚之機可有之か、呵々々、例之過激徒本縣人なども集會左印江出懸  
 ケ候よし、昨日も池月生一寸参り何に話候へとも、不省故直ニ辞  
 去、何か又建立はすまいかと存候、其縣下ハ近韓地定而諸新聞可有  
 之候、又々英人ヲ鮮人ハ砲撃と申事也、何分殺氣廻り候ものか、如  
 何々々 ○中沢母此節若シ崎陽江参り候や、一厄介ヲ増候と存候、  
 内ニもいろく入費積累屹度嚴儉之法ヲ立、家政改革規則ヲ撰出、  
 当月一日分行居候、併シ臨時之経費多ク是ニハ殆当惑いたし候、其  
 元なども随分節儉第一二候、お清書中随分省略いたし候よし申越  
 候、感心く、中々少婦之及ばぬ事、併其元之御シ様次第と存  
 候、田内もお鶴此節全癒、かの禊社入二日ほどと修行之處、右懸川町  
 訃音ニ付、夜前今退席帰家、忌明より又々入筈ニいたし候、心術を  
 一磨キミガ、ネバイケヌと申事一同大競也、亦奇妙く、予嘗  
 謂今日教法之実効アル者禊社連ニ若クナシ、毎修行必四五名之進歩

修身基本ヲ拵出し候ハ、外ニ神道ニモ諸宗ニモ未聞トコロ也、以為  
 如何 ○洪川老衲頻ニ張込、自得や鳥尾生等四五輩結社両忘社と  
 命、月ニ一度集ル筈、其會約ヲ書テクレとアツラヘラレ未腹稿、い  
 づれ今月末ニ一會可致建立存居申候、亦方外一樂事也、自得近来兩  
 國ノ西御船藏アトへ引越、蓮岳ヲ正面ノ水上ニ受ケ実ニ佳境ナリ、  
 洪川何トカ一絶アリ、今忘タリ、尹ハ文字アリテ先僧中ニハ難得人  
 物也、書も亦不凡、黄檗ノ木庵ヲ刻意セリ、木庵独庵等肉筆崎陽ニ  
 ハ沢山可觀畫禪、如何、後便必示及、匆々不乙々々  
 十月十五日午前十時過

慥翁

豚犬

正治殿

このたひのことにつき折ニふれて

わか袖にかゝる秋とも白露の おくをよそにも詠めてしかな  
 かれ残る老曾の森の下紅葉 かた枝ハ風のさそひ尽せり  
 定なきものとしるく神無月 またき時雨て散る紅葉かな

○ 「朱書」(明治八年十月十八日付)

中沢未亡今ニ滞留ナレハ宜敷意可傳候、家人皆々今も宜申出候  
 本月九日細書同十七日達嬉敷披見、新寒俄生候所、其元兩人平安、  
 珍重々々、爰元考<sup>ウツマ</sup>朽始一同瓦全宜降心可致候、中沢母子并森生隨  
 行、六日崎陽来着、客月廿七日発福山候よし、又々大厄介増也、併  
 十五日ニハ帰ル云々、予ハ未信必今月末比か事ニ寄ルト来月へも掛



り可申、森生厄介中之ムダ物早く追歸スヘシ、実に厄介「數文字欠」離事亦自業自得不可奈何也、廟堂大モメ近日必「欠字」出すヘシ岌々乎タリ、一昨日辰吉參り密話ヲ聞一愕然タリ、我等ハ朦中誰ニも不逢、併シ河口ナドモ其話ナリ、実ニ都下洵々タルヘシ、不識ものは恬然たり、征韓之ソレ矢何方ヘ向ヤラ不可測、可怕可笑可驚也、如何々々、新聞上之戦氣も中々やかましく、吾曹ト報知ト曙ト往復中毎日々々弥出弥奇也、併シ皆辯チヤラ組ニテ、一ツ之精神アルナシ、文章学者之文明氣取も何之益ニモナラヌもの也、吾人可省々、新聞ハ日々電覽スヘシ、法律會ハ尤よし、併シ何にても腔子裏ニ物なければ正カノ時ヘコムモノ也、能々禪ヲしめ覚悟第一ナルヘシ、崎陽ハ何ト申テモ韓地ニ隣ル故、辺報時々聞可申、此上葛藤如何相成哉、不堪想像候、敬字先生五古詩アリ、又誰カ次韵アリ、載在新聞見ルヘシ

○先日村山木郎へ彼法律抄物ヲ送致、郵便賃ヲ沢山取ラレ大損いたし候、是亦龜妄之所致也、後來可警々

○お清婚嫁之届最早近日ニ出可申、中沢之家督も先日済、一切健吉東京府へ出、長谷川トカ云仁ハいつもへこみ申候、為安心申遣候  
○家産資金ハいまた下渡無之、今月末か延レハ来月か政府も中々それ處テハ有マイと想ヤラレ候、今月末より来月へ掛テハドンナ變カ有ルカ不可測云々、田内モ今之家ヲ賣二階へ寓スル筈ナレトモ例之因循ニハ込入候、府下賣家沢山出申候 ○布山家モ今ニ不賣よし、併シ五十円餘ナレハ買ウト向ノ門田トカ申よし也、先日モ潮弟へ早く安賣デモ拂ヘト申遣候、礼弟モ今度之モメニ而又東遊カ延ル

カと氣遣候、併シ官海之荒中誰ニテモ「數文字欠」サヘシテ呉ルレ「數文字欠」拜命ハ「數文字欠」ト思フ也、此際ニテどふか弟輩もチト進級ノ策ヲ付度ものと存候、其元ナトモ必注意スヘシ、如何々々、謙之又々借金出来候様子、退塾ヲ勸メテモイケス実ニ困物ナリ、健吉官望モ中々六かしく、唯々家用ノミニ送日、何之稽古も不出来残念千万也、其元など考ハナキヤ此辺之事少シハ氣ヲ付可申候、当月家政改革も中々追付事ニテナク、早定額ヲ十金餘超過セリ ○諸省減吏モ先見合之様子、定額ハ弥減り候ものと相見ヘ候、教部省ナドハ其中七万円ニ而止マリ候様子也、三千円ハ減スト云事コハ本来少キ「數文字欠」而仕合也ト云々、ソレテモ今月八月給渡カ「數文字欠」かしいナド申居候、昨日受取安心也、勿々擱毫不宣

十月十八日午前九時新寒夜来北風烈々、両国辺火アリ

健翁

兄輩

正治殿 時候随分自愛スヘシ

お清との 感冒ヲ防クヘシ

偶題

あはれ也老曾の森の下紅葉

片枝ハ風のはや誘ひけり

余兄弟六人已亡半

万代も千代もあたるなり世の中の

つねなき事を菊の上の露

○ [朱書] (明治八年十一月二日付)

十月廿四日森生ニ付スル書及菓子箱玉類等夫々同三十一日森生直ニ  
来訪、慥ナル信ヲ聞兩人共無異之由、珍重々々、爰元老朽始皆々瓦  
完消念可致候、中沢後家等存外長滞留ニ而無く厄介と存候、併シ縁  
属無致方事ニ候、一旦神戸迄着船、夫今福山へ川蒸汽ニ而行候由、  
慥ニ到着と存候、安心可致候、婚届未タ不致候處、福山母里ノ養女  
ニいたし候段甚佳々々、乃其通りに手首尾可致、委細健吉引受居  
候、安心可致候、森生も其事ニ預り周旋いたし呉候よし也

○ 畫三枚其中石之書様尤不出来、梅が一番宜様ニ候、如何々々、玉  
八田内煙草入之してニ所望即遣候、一同大喜悅也、カステラは大ニ  
佳品賞味いたし候 ○ 時事先一旦穂波ニ相見候へとも、底浪は今以  
不穩様子、日々長刀結髪党入都と申風説也、併シ何之事も有間敷と  
推察いたし候、存外政府英斷感心、呵々、有歌為證

乱咲野への矢草の外にまた 静けくにほふ園のしら菊

以為如何、餘論ハ新聞ニ譲り候、近日頗若有所見、難騰筆舌可想像  
候、昨日の朝は洪川ノ碧巖提唱ヲ聴、十一時頃（朱書明六維談ハヤメタ祖也）芝ノ西養軒演舌會

ニ赴キ、久振ニ而新奇活澆論ヲ聞、頗洗旧耳候、來會先生家殆十人  
福沢、西、森、西村、杉、津田仙、西村ト津田二人演舌、西村ハ英  
人ノサソヒヤルエコノミ中ヲ三枚計訳出シ演ス、人民教育ノ事也、  
随分面白候へとも、人ノ論ヲ訳スルノミ、津田仙ハ自得ノ農学實際  
論頗有味、感心、予至リシハ正午也、未一人モ傍聴人不來、福  
沢ト西周ニ逢以後可來ト約ス、福沢ガ何ヲ云テモ大開也、イロク活  
話不可盡筆紙、想像スヘシ羨シカラン、如何々々、谷ト植木ト二生

來會、其外ハ本縣人ハ一人モ不來、聴衆ハ殆三十人計講堂不能容盛  
大哉 ○ 潮江弟弥今月中旬迄ニハ東遊之筈、屈指相待候、（当分ニ妻社ノ  
書記ニナルト云）燈下同參道味且墨水飛鳥等ノ閑歩皆人間樂事中之最大ナルモノ  
也、他ノ官榮や外物ハ真不足言也

○ 三宅憲章へ托候かの貸金果武田生違約ドコヤラへ行詮議中也、昨  
日健吉ヲ三宅江遣候處、尹大ニ氣毒かり、是非、詮議仕付、決而  
御損ハ不掛ト也ト云々、（朱書其元ヨリモ憲章へ普通可致候）是ハ最初より尹か引受ナレハ、此度之事ハ  
必成就スヘシト思フ也、如何々々、実ハ心配いたし候

○ 來春二三月迄ニ是非帰京之策ヲ付不申テハ不相成、次便ニ尾崎氏  
江書通可致と存シ心得居候、皆々一同望東京之志ト云々、甚尤也、  
然トモ其元ハ格別之子細有之候ハ、予老且衰病日甚於一日故也、近  
來疝ノ故か足腫レ指形入（ユレガク）両脚同シ、椅子か毒なりと云、然れとも出  
勤ハ先続キ居候へども、実は餘程衰老想ニ非永世者矣、請勿輕一日  
重官榮也、如何々々、書到此不堪一愴然候、先擱筆、不一

十一月二日午後小春如春、是日来客中

慥翁

豚兒等

正治殿

お清との

尚々皆々も宜申出候、委しき直話にて崎陽旅寓景況聞想像いたし  
候、随分好家暖室のよし、何分宜候、隨時自愛可然、併燈下可親読  
書ノ好時節、我等サヘモ十時迄暁ハイツモ四時半分燈読書候也  
謙之ハ又、チト借錢ラシク込タモノ也、何ソ好考ハナキヤ、外人

ノ巖刻家へボウイニ遣度存居候、如何、兵籍入ノ年齢ヲ扱所々問ニ  
来處、未タ其年ニ不滿来年也ト云々、渠モ何トカ身ノ檢束ニナル事  
ハアルマジクヤ能く考呉度候

お鶴は入禊社後大に氣質変シ真顔人ニナリ、篤実謹勅チトヤボラシ  
ク馬鹿ラシク相成候、併自此一段進歩シテ真知見ヲ開可申と甚相樂  
候

静モ入道後余程チガヒ、先家ノ為メニ能働クモノニ相成候  
但謙之ノミ生意氣也、亦可樂カ、如何

○是日中村権大史等三人ノ按察使トナリテ東西江探索ニ行、中村ハ  
九州地下云々、新聞ニ出ヘシ、田内話也

○ [朱書] (明治八年十一月六日付)

小畑生赴任便ニ付一書候、新寒稍生處定而兩人共無異消光可致、珍  
重々々、爰元我等始皆々瓦完罷在候間、少も懸念有ましく候、昨五  
日小畑生暇乞ニ参リ此十日出達之よし、荷物ハ七日ニ仕廻候由ニ  
付、お鶴など何か遣し度油本結等買求候、先日は森生直便又今度ハ  
小畑生便、双方都合宜と皆々喜ひ申候 ○先書粗申通、是非く帰  
省之策付ケ可申、小畑江も依頼可致候、尾崎江今度書遣し候、猶其  
方も依頼可致候 ○三宅憲章ハ先日健吉ヲ遣し、彼武田生違約行  
方不知事等話、何分處置いたし呉度と頼込候處、彼モ甚氣之毒此事  
ハ私分是非御周旋可致、決而御心配ニ不及ト甚慥なる挨拶之よし、  
併シ金策之事ニ而猶心元なく候間、其方も一書憲章江遣シ、猶偏  
ニ依頼之段注込可申、是かもし水泡ニ帰候而ハ実ニ不安候、よく

く注意可致候

○内も何角費用重り、先月などは彼節儉モ益々不立、殆ント六十七  
八円ニ登り候よし、健吉経済方も六かしく、第一謙之月々六円甚無  
益なれども、是亦其金ヲ割拂ニ借錢ヲイヤシ居候様子ナレバ、今更  
仕方なく候、幾太郎も厄介未離、昨日ハ禊所々学校世話人入用ト申  
ニ付、健吉ヲ望候へとも、弘瀬生ニ而事足候や見せ候處、弘瀬生ニ  
テハ事不足ト角健吉と申事考中也、千住在ノ小学校月ニ五円計ハ具  
候様ニ申居候、田中生ハアノ通又々義太ト申、扱々厄介ノ不離事ト  
存候 ○未家禄金も不渡、是も今月中ニハ必可渡、其金もどふぞ好  
手段付不申而ハなるまじくと心配いたし候、三宅辺江頼度と兼てハ  
存候へども、今度之事も有之考中好考有之候ハ、可申越候、公債證  
書ヲ買か一番ト申事也、如何々々 ○政府風波も先上ハ波ハ静マリ  
候へ共、底濤ハ益不可測よし、按察使ニ中村禎輔被命九州へ行ト申  
事、一人ハ忘れ東江行ト云ト角一ト地震可有之歟、例之暴激家東隣  
ナド何カ毎々集會アルト云々、池澄生なども頻ニ奔走、神原氏か下  
コカ江出仕ヲ世話いたし居候よし也、暴ヲ以易暴云々、如何々々  
○ケ様之世態何分都下ニ而觀劇か一番と存候 ○潮弟も弥くる筈、  
今月中旬ト存候、只々屈指相待候、共ニ觀劇ヲ相樂候、昨日ハ西岡  
ヲ訪、一寸遇ヒ出掛ト云故辞去、随分可話漢也、夫も津田仙之農  
学実地論面白、健吉ヲ遣し為学度と存候、農家之事等一覽可致有益  
之書也、昨日晩宍戸江行閑話、例之因循併一番省中ニテハ解事人  
也、呵々、今朝渋川會ニ而奔走中裁此書、匆匆擱筆、千萬下読せよ  
十一月六日朝六時過点燈

健翁

## 正路殿

豚犬

お清との

尚々田内モ依旧お鶴入社後氣象大變極実貞ニ相成、甚田内モ喜ビ田内も近日入楔社ト申居候、一家交膝説無生古ノ隴居士ノ如シ、呵々、第一兼井か餘程よく相成候、是亦奇縁哉、本来面目坊ヲ一度對面せしか如シ也、太奇く、如何々々

○ 「朱書」(明治八年十一月七日付)

拜啓新寒稍生處、愈御清穆御奉職可被成奉謹賀候、隨而老迂等瓦全罷在候、乍憚御省念可被成候、不相替豚兎事大ニ御庇恩忝奉謝「欠字」候、御無音「欠字」本懷候、陳者御出軻之御者御懇來其節粗心事御話申候通、老迂近來益老衰、加之持疾之疝痛屢さし起、腸胃カタルト相成、夏已來頻ニ暴瀉、此節両脚浮腫、何分椅子之からも有之、度々引入勝ニて、豚兎儀何卒來春比帰京之策相成申間敷哉、実者老後病身此向ニ而ハ永ク在世も無覺束、豚兎左右ニ不在候てハ、何篇甚不自由ニ而殆困却仕候、此心事御汲分何分にも二三月比迄ニ帰策相運候様、遍ニ奉依頼候、いづれも旅勤ハ厭可申訳と存候へども、老僕之願ハ格別之情願と千万御諒察被下度、不取敢右情実為御依頼如此、餘縷不能尽筆紙、御憐察是祈、勿々頓首

十一月七日

奥宮正由

尾崎盟臺

研北

再白寒温不時候、隨時御自重為國家御勉強可被成候、廟堂も多事紛々、今ニ底波不静様ニ被伺候、老迂先比姉ヲ喪シ益老衰後落力申候

枯残る老曾の森の下紅葉

かた枝は風に誘はれにけり

飛鳥山あすをもまたぬもみち葉ハ

けふの風やいのちなるらん

御憐察御咲評く

○ 「朱書」(明治八年十一月廿日付)

兼井之儀ハ後便詳示スヘシ

本月八日書同十六日達嬉反覆披閱、新寒稍募處兩人益御無事、珍重々々、爰元考<sup>(マ)</sup>朽始皆々瓦完罷在候、安意可致候、森生直便之後無消息、皆々待兼候處、漸得此書喜申候、帰京策何分にも其地ニ而付不申由、又々岡内か岩崎辺へ頼可申と存居候へども、短日旁無寸隙打過候、いつれ近日どちぞへ依頼可致、先便尾崎へも頼遣候、我等事も格別ハなく候へとも、次第ニ寒ニ向ひ、且持疾之疝腸胃症有之、兎輩そふく長ク旅勤之時節にても有ましく、能く考慮可致候、近日は先統而出勤、併シ朝ハ膳先キ之酒力小車ニ助ラレ候計也

○ 先比も申遣候かと覚候三宅貸金も、今以憲章病氣之由ニ而、先日も義太郎ヲ直使ニ遣候處、近日ニ是非周旋可致と申居候、そち今も一書可遣候、此事若すり「欠字」かされ候へハ、実ニ不安事ニ候

○先日家祿資本も於東京府渡り、三井為替二而、札ト公債證書ト半分九百円餘有之、先筆筒江秘藏いたし候、何も策付不申候、高橋安彦ニ話候處、公債證書ヲ買か一番たト申候、併シ大藏省ノツブレル事も有ましきか、もし此時勢変遷ニよりどふなる事かと掛念なき能はず候、如何く、時勢ト云、都下大困弊、賣家ナト町く相望有之、小商家ハイケンくと每人申居候よし、併シ時勢論も先寐人カケ、征韓党も新聞ニ為消シヤルト云勢也、薩辺之動靜も先屏絶、何も聞不申、我縣ハ士族計ニ非ス、今ニテハ板垣も治り付兼候よし也、中尾橋吉説、雖然廟堂ハ何之事ヤラ実ニ馬鹿ラシク、同志もなく話事も不出來、只く必笑黙識スルノミ、○參禪益有味、類ニ碧巖ヲ面白存候、洪川ハ中く文才有之、老衲此間も飲酒、和誦二十首早速出來、隨分面白、批評等いたし遣候、両忘社中也次第ニ人員加り、山岡鉄太郎ナド參社、甚愉快ニ候、山林益有味、是可消吾憂ト老泉之句ヲ覚申候、如何々々、書到、此忽報八時、即刻擱毫出勤ス、勿々不乙々々、

十一月廿日

健翁

豚犬等

兼井ヲ齋藤安通ト云禊社ノ高弟

ヘモラハレ、先約束いたし候、近日約之筈

正治殿

お清との

尚々田内も此間禊社へ入、日上り大ニ氣象替り、稍洒落ニ相成候、おすても四五日計ニ而修行上り、今日ハ歸筈也、可喜く

○ 「朱書」〔明治八年十一月廿九日付〕

本月十九日出書同廿五日着反覆致披閱候、寒威遂日募候處、愈無事勉勵之由、珍重々々、爰元我等始皆々依旧瓦完罷在候間、少も懸念有ましく候、潮江弟も漸本月廿日夜着、久振ニ西窓話大ニ相樂申候、爾後三菱商社へ被雇、日出夕夜迄相勤甚世話敷、却而氣毒也、何卒外「欠字」官員ニ有付度いろくいたし候へとも、先一二月ハ三菱へ入り居候よし、また月給も未定、酷薄ナル使方と存候、○廿六日ニハ島原劇場江伴ひ、其日ハ田内トモ都合八人ニ而、久振ニ面白、鉢木彦三郎時頼、馬士菊五郎時政ヲ、馬士か話ニ「欠字」り、餘程菊五郎かシヤヘリ面白覚候、淨瑠理ハ頼光袴垂、コレモ右兩人大当く、調升亦進歩大評判也、○吹上御濱所ヲも一見、甚好シ

○時勢何か切迫らしく、新聞上ニ「數文字欠」定而一覽可致、併シ元老院漸章程出來、近日開院ト申事、太晚く、○鳥印か祇候ハチト可笑ニ似タリ、如何く、建白物山積故、元老先生か立法ニ関スル丈ケヲ取扱ト云ハ、便利ヲ考候功者ニ而、是も無上評判あしく候、如何く、閉か開か未可知ト云々、八ヶ月計奏已上休暇ニ而、月給只取りハ甘イもの也、世間かやかましく云も、亦宜哉、松七江先日も話ニ行、チト月給残りヲ借度ト戲言、大笑いたし候、○三宅一件未埒明、実ニ困却也、奉還資本金もいまだ預ケもせず考中也、策アラハ可申越候、○先日岩崎介吉へ弟ヲ伴、半日計談話いたし候、其元之事も先ハ考呉候様申置候、弟も即今ハ六かしきよし也

○近日家内一統參禪ニ志、其中お鶴や婢など早悟かけ候様子、中く感心也、洪川和尚鎌倉円覺寺江轉住、此間出達セリ、公按ヲ

皆々授かり凝工夫、兼井かまた按か付かぬトテ大オコリ、お鶴ト喧嘩、大笑く、お「数文字欠」可話聞候、来春兩人帰来ハ速ニ禊社か禪かへ入ラスルト、皆々大サワキ也、亦奇妙ナル事ト独笑く、真ニ龐居士か一家説無生ノ風アリ、東京百萬中有比類や否、呵々

○近日法律會如何、畫如何、チト密画ノ小景ヲ書中封込可越候 ○實事神道一件、默雷ナト聞付、是非く老朽ヲ招度ト申由、来月四日一會社ヲ催シ、其主盟ニ来テクレヨト云、是亦可樂く ○崎陽も冬枯ニテ面白事有ましく候、サスカ東京ハ夜ハ寄せ晝ハ劇場樂か沢山ナリ、早帰ニ不如也、如何く、匆々不一、

十一月廿九日

慥翁

正路

豚犬

正治殿

お清どの

尚々時候随分自愛專一也、護寒具可用心候

○〔朱書〕〔明治八年十二月十三日付〕

客月卅日之書本月八日相達忝反覆致披見候、寒威烈々兩人依然勉強之由、珍重々々、爰元老朽始一同無異瓦完罷在候、省念可然候、今年ハ寒威早ク先日早厚氷あり、崎陽辺如何、切ニ護寒撰生可致候、陳者兼井縁談も相整、本月十二日首尾能相濟候、大ニ致安心候、随分宜様子ニ候間、左様安堵可致候、何ニ付ても入費重疊ニ候、憐察々々、都合五六十円ハ費申候、併シ向原是より向々坂田先生跡ヲ受合、禊社女教院ヲ惣轄するよしニ候へば、随分人の見込も可有之

と存候、追々はどこぞの神官にてもなり候へバ、宜ものと存候

○時勢論も稍静マリカケ候へども、元老院之サワギ四五十人計免職、其中ニ田内ハノガレ、大喜く、先く致安心候、お鶴等參禪サワギ大ニ名高ク評判ニなり、明教新誌ハ出候、遠州辺にても大評判云々、亦不思議也、明教新誌ハ坂崎生ナド編輯ノ新聞也、可一見 ○礼弟三菱商社へ入、十四等ニ相成、日く世話敷、早朝頃夕夜ニ入退出、甚氣毒ニ付、いろく心配いたし候へども、当節減員時不可奈何、いづれ春の事と存候 ○其方にも進級未可知よし、併シ暮中ニハ一等ハ可進敷、春三四月比ハ是非く帰省可致、船賃ハ半金ハ償可申候、我等も来年ハ愈辭職隱退可致と心期いたし候 ○時勢想像も此節ハ半忘却、併新聞上には時く顯レ出、見れハ見るにつけ旧習感ヲ生シ候、呵々 ○先日ハ默雷等と一會小倉衛門介宅、蜷川某と云博古家真ニ珍人也、神代遺物等古器物、大抵ハ探索いたし実験窮理セリ、洋人ニも大分知己有之よし也、博覽會時務之官員也、月ニ二度會社ヲ結、奇話新説ヲ出合セル筈、一方社ト名付、金ヲ一方醸廻會也、今月末ハ默雷か宿ト云、皆々當時之才子組面白覚候、愚弟も先日ハかの演說會ニ相伴、其日ハ宮崎生も同道セリ、春ハいろく樂事可有之、山林益有味と相樂申候

十二月十三日

慥翁

正路

豚兎等

正治殿

お清どの

尚々奉還資金も未タそれなりニ致し置候、当暮は実ニ不融通ニ而、貸候へハ六かしき由ニ付、いつそ東閣がましかと先考中ニ候、併シ九百餘之金を暮ニ遊ハスも随分迂愚老人と自笑いたし候、如何々々兼井此度ハ自分ニも随分はづみ、何より宜事ニ候、婚礼一切ニも五六十円ハ費候へども、一生之片付と存候へは、この位ハ不可厭事ニ候

布山家屋敷一切五十円ニ賣拂申候、いかニも安きものと存候、東京も賣家有て買人なしと云、世の中餘程窮迫ニ相成候、覚悟不致テハ必至と困却之時至ルヘシ、如何々々、

○

書添、昨夜ハ午後八時前、兼井ヲ高橋仲媒召連レ、拙老弟田内夫婦とも参り、女教院ノ一間ニテ婚礼盃首尾能相済後、丁寧ニ饗應有之、坂田先生夫婦も大喜ひ、吾子ノ嫁ヲ取シ同様と云々、斎藤ト云モノヘ今夜ハ此教院ヲ譲リ渡シ、今夕より別宅江退隠スルト云々、然レハ女教院ノ一切ハ、斎藤引受ニ相成筈也、随分兼井も不知人ニ而もなく、此縁必熟シ候様ニ思ひ候、決而懸念有ましく候、可祝  
く、○濱田男丸口次分之貸銀、一月迄延期申出、無據聞置候、一月ハ廿日限之筈也、三宅ノ四十円ハいまた埒明不申候、是亦近日必取立可申候 ○豊田生江貸有之候や、もし貸候ハ、可申越候、謙之が足シ前ニ可相成候也 ○弘田久助類方々又々養子相談ニ相成申候、此儀ハ謙之も容易ニ承諾不致、先考中ニ候、此事委後便、不復一々々、勿々頓首

十二月十三日夜午後第七時

髓翁

豚児

児治生

○

折にふれて

正由

わか袖にかゝる秋ともしら露の よそに詠めしことぞ悔しき  
定めなき世とはしるく神無月 またき時雨で散る紅葉かな  
きのふまで共に飛鳥の紅葉はを 愛むと思ひしかひなかりけり  
そめたらぬ紅葉を風の誘ふ也 時雨る、色を袖に残して

やく塩のからくも老の残る身ハ 雪と消にし「以下欠」

あすしらぬ飛鳥の山の夕紅葉 けふの嵐をいのちにはして

万代も千代もあたなり世の中の 常なきことを菊のしら露

偶成呈洪川和上

撫枕通宵夢未成 千思万想此時情 頻呼小玉曾無語 要認檀郎真

個声

○ 「朱書」(明治八年十二月廿三日付)

「前欠カ」相達反復披見候、寒處愈無事奉職兩人同様之よし、先珍重々々、爰元老朽初皆々一同依然瓦完罷有在候間、少もく氣遣申間敷候、陳者兼井事も大分有付、毎々参り大ニ安堵いたし候、潮江弟も三菱商社へ入り、十四等出仕ニ出候、毎日早勤夜帰、甚気毒ニ

候へども、今姑らく不待ハ出来ましくと存候 ○今年も既暮になり  
只光陰を虚費せり、可惜く ○廟堂上此節稍泣寐入之風景アリ、  
併シ黒田朝鮮行モ未出立よし、是ハ森か支那行之左右か聞てから行  
筈也云々、朝廷ハ何か策略も有らしく候へども、そふく注文ニも  
行マヒトノ風評也、風聞説ハ一切嘘く、遠郷ニハイロくノ風説  
立もの也、諸新聞ヲ能々見るべし、何事も先来二三月ニ事始あるへ  
し、夫迄に内幕ノ活劇ヲ見るか宜シ、併崎陽ニテ今一等ヲ進級シテ  
不帰ハ、行タ詮ナカルヘシ、如何く

○健吉へ用事一切ハ托置候間、安心可致候、森生も過日参り、建吉  
ト話合いたし居候 ○戸籍等之事も委細布師田へ頼可遣、丈八か幸  
ニ戸長之手傳ヲスル故也

○彼資本金も未奈何、メツタニ貸与セハ、無本ニナルカ恐シキ故  
也、如何々々、上策可申越候 ○今暮ハ大變物入、平生よりも甚  
シ、然レトモ亦どふぞたふぞ事足可申候、書到此微酔稍欲眠、即擱  
筆、匆々不乙々々、

十二月廿三日夜晩酌後醉中

由慥齋老人

豚犬等

正治殿

お清との

尚々当年中ニハ等級も上り不申候哉、如何、来春ハいつ比帰省候  
哉、三四月迄ニハ必帰省すへし、帰京之上ナラデハ進歩不可有と存  
候、岡内か誰そへ依頼いたし置度存候 ○かの貸金之事も今以て不  
取、甚困却、何卒好策ハ無キヤ「数文字欠」ソチヨリ可遣候「数文字

欠」 非トモ埒明可申候

参禪ノ樂事ヲ

十方世界儘縱横。迷霧晴来乾闥城。誰識龐家真樂處。團欒聚首説  
無生。

○ 「朱書」(明治九年一月二日付)

新禧万福兩人とも依然越年、珍重々々、爰許考朽始一同加齡、宜  
休意スヘシ、昨年進級之左右相待候處無消息、如何々々、東京も依  
旧不振、新聞上のごとし、例之慨歎ニ不堪候、一日例之通不朝、午  
後拉弟及弘瀬生、逍遙墨堤、探梅漫步、近来之適意也、第二十八年  
来之曾遊を思出せしと云、可想像候

○崎陽征韓説如何、政府も何かもめかへり候様子、可笑可哭、川口  
家を旧年ニ而明ケ、跡ハまた誰ニも約不申候、鹿児島人崎陽七等ニ  
而出仕之親らしきもの望ニ而貸屋ニいたし候かと存候 ○彼資本金も  
今以其俶臥さし置候、いまた好策なし、如何々々、田内も家不賣、  
貸家ニ可致なと申居候へども、正か借人も無之家ハ頻ニ賣家多シ、  
世上金融大ツミ之よし、最早六かしく ○齋藤も随分宜越年、兼  
井有付随分よき様子也、三日迄ハ千住奉仕之社用ニ而留守也、故ニ  
昨晩も一宿いたし候 ○崎陽之新年如何、珍らしくお清など羽子ツ  
キ可申、ちと諸勝近傍可遊、帰時話ニ可致候 ○今日は義太夫ノ寄  
へ行筈、太匆忙、擱筆不一

一月二日

慥翁

家人



## 正治殿

お清との

尚々新寒随時保護可然候

一同

○ [朱書] (明治九年一月九日付)

十二月廿六日書本月五日相達反覆披閱、寒威烈々之處、其元清とも無異之由、珍重々々、爰元考<sup>マヤ</sup>朽始皆々依旧瓦完省念可有之候、明越之寒威却而西国甚しき由、崎陽も十八日夕三日程雪降候よし、薩辺も大雪、土州も三日計降、奇寒ト云々、却而東京ハ未見雪、寒威も開化ニ和らき候や、是も文明之一徴と存候、陳者旧冬進級之佳信可有之かと相待候處、依旧無事今春ヲ可期か、如何々々、三月ヲ不待、是非帰京云々、併シ百三三十円之旅費を取候而帰京カ宜候、それニ付岩崎江話込之段、我等も春來未訪、近日必一訪可致と含居候、岡内ハ如何、是もどこか轉居聞合一訪、弟ノ事も可依頼存候故、其序ニ帰京一件も托可申候 ○弟官途も今ニ不博取、甚氣毒、毎日商會へ出勤、日出より夜八九時迄実ニ刻薄之使方ニ而、流石之篤実漢といへども不堪、頃日暫引籠辭職ト申置候處、是非出呉候様、類ニ同僚分被促、昨日夕又々出勤いたし居候、丁野岩崎などをあて二いたし候處、存外不埒明、チト弟も不平氣有之、最氣毒故、蒲生へ頼、丁野へシカト云込候様取計置候、早今月か来月ニも帰縣と申、是ハ類ニ留置候へとも、先途見付無之テハと切ニ申候 ○彼三宅濱田取次之両口も今以返金不致、其中去暮ハ兼井嫁入騒動など

江存外人費多ク、今月八月金渡迄ニ不足、かの奉還金之利子四十円を遣錢ニいたし居候、近来益風袋入、殆不可奈、併シ儉約ハ随分致居候、河口へ借候家も河口イナリ町辺江轉居、跡ハ先貸テモ賣テモトいたし、慶安へ頼置候、カコ島人ニ貸カ賣カ之相談ニ成かけ、未埒明、賣レハ二百円と申置候、今ニ賣レハ安ク、買ヘハ高ク、家ハ沢山町家など町々ニ相望テ賣札有之候、不景氣と申居候、征韓騷キ此上ニも戦ト成候ヘバ、都下など益窮スヘシ、黒田副使も六日ニ愈出帆、井上も隨行、不識結果如何、世上ハいろく風評アリ、所謂内外混乱、殆世變之又起り候事と例之小杞憂いたし候、新聞紙上ニもちくく見ヘ候、過半は壓制ヲ議り文のみ、實閉人口如塞川流に至り候、呵々く

○例之參禪騷キ大流行、内一家ハ渾而禪客のみ、只理屈ヲ云不入モノハ謙之一人ノミ、阿鶴靜などは既ニ小悟處有之、此間中ハ臘八ノ式、一七日被行、朝參暮參、夜モ十二時迄坐シ、時く所見ヲ呈シ、坐中ハ警策と云棒ニ而背ヲ叩カレ候、我等モ夜前ハ一度喫棒、所見ヲ呈候處、初ハ少許可、後ハ理屈ニ落ルト被呵、却テお鶴靜なとよりは難、被許潮弟も一公案ヲ授ラレ、田内も同然、皆々怩々憤々ニハ候へども、卜角見解理趣邪魔ニナリ、今ニ不被許、大二慚愧ニ不堪候、凡居士組十八九人、其中婦人四人計、遂ニ「トホカミ」連中も村越翁參禪ニ出掛ケ候、洪川之一滴、中く盛哉、可驚々々、以為如何不入禪ハ話なき様ニ相成候、其元も帰京候へハ是非く進込と申居候、呵々々、書到此夜參之刻ニ迫り、乃擱筆、勿々不宣

一月九日日晡前

慥翁

弟

豚犬

正治殿

お清との

尚々時候随分保愛可致候、是非早帰之事ナレハ、都合可申越候、甚  
匆忙中お鶴分申出候

○ [朱書] (明治九年一月十日付)

今日暁分大雪、例之持疾ニ而引籠、此向ニテハ積一尺なるべし、晩  
ニハ雪見旁ドチゾへ遊歩可致、弟ハ早々出勤、可憐生 ○湯島參禪  
大ニ盛、七日分臘八撰、心始り百幾人と申衲子聚首、洪川老師日々碧  
巖ヲ提唱、一日交ニ無字管長川老ノ金剛經ヲ講、中く面白、毎夜  
參り十二時迄先續居候、其中二段々公案ヲ解得セリ、お鶴静なども  
隻手声ヲ早二三度もヤリ、初見ハ已ニ出来申候、実ニ老朽など学解  
邪摩ニなり愧入申候、併一二則ハ了得、凡居士十九人自得鉄舟など  
も參候、鳥尾ハ一度も不參、他の念佛ニ迷ひ候よし也、昨夜も帰路  
雨にぬれ、田内夫婦予静義太郎五人寒雨中ヲ苦行、却而勇猛心を  
生、皆々欣然タリ、健吉ハ懈怠勝チ、謙之ハ生意氣ニ而不參、お鶴  
などは大憤発、中く感心也、静も餘程丈夫になり、トホカミなど  
ハ付一咲候、然トモ昨日も兼井之處江手傳ニ行終日忙しく、夜參ニ  
ハ精神ヲ生候、亦不測也、今日も午後分參答也、考朽今迄見解ゴ  
マカシ之處、今般より真個修行、稍壯健ヲ覺、弟モ夜前ナドハ玄閑

ニ而独坐いたし、大衆中ニハ不入候へとも、大ニ離見解候由、何デ  
モコレデナクテハ外ニ無別法と覺候、如何々々、即吟

立雪浴沂同一機 光風霽月放吟歸 孔門初訣祖宗奧 三界衆生似  
而非

コノ轉落ハ付テ見ヨ、

一月十日朝

正治兄

慥翁

○ [朱書] (明治九年一月廿日付)

本月十二日之書同廿日達シ反覆致披閱候、互寒甚敷處、兩人共無異  
加年之由致安心候、爰許我等始皆々互全消光、潮江弟も同様、折々  
同伴散步尋詩候、併シ弟ハ商社存外繁劇、いつも夜ニ入退食、弟も  
甚迷惑かり候故餘りニ氣之毒ニ而、岩崎や丁野などへ頻ニ苦情申通  
候處、一昨日分岩崎家塾之世話いたし呉候様申来、昨日分駿臺之高  
樓ニ而其子弟等ヲ教授いたし、午後迄ニ而相濟、随分尊敬せられ、  
岩崎一家内大ニ依頼之よし、夫ニ而先留足ニ相成一安堵いたし候、  
併し月給ハいまだ幾個位と申事も未知よし、先日丁野生来り候故、  
四五十円ならでは家内を率ひ候事も不成、是非帰郷と申居と切迫ニ  
云込置候處、果右之都合ニ相成候、多分増加可有之候、岩崎之婆ニ  
も頻ニ家人を呼寄可申段勸メ居よし也、可喜々々  
○ 扱、其元進級一件も未何之沙汰もなきよし、併改年来ハ必可有之  
ト云々、後鴻必佳音可承候、帰京一件も岩崎介吉へ篤と申込置候、

尾崎氏江之書も又々改メ可通候、尹因循ハ今ニ不始事ながら殆ト窮し候もの也、岡内などへ申込度存候へども、此も轉居之よし、未知所見合居申候、孰レ岩介辺も悪しくは不計よし也、併シ帰京船賃も中々貧生之難辨本省へ呼上せ候策第一と存候

○擬征韓一條もトカク近日人数取調有之よし、商會郵便船を頻ニ調候よし也、いか、相成事やら政府例之因循壓制新聞上ニ云如ク也、如何々々、崎陽辺ハ戰場之足溜りと申事ニ而、チク／＼在崎人も東京江轉スルよし鹿兒島人ナド承り候、如何く、世説如此廟堂説ハ不可識、近來ハ誰ニも出會不申候、唯々洪川師參禪のみニ而餘事無之候、先日も云通り臘八一七日中大雪中ヲ晝夜通學、其中半日計懈り、疝氣少々起故也、然ニ竟ニ無所得空坐過セリ、雖然従前似セ見解ヲ脱化シ、赤裸々ニ相成、大ニ慙愧敗闕ヲ納了レリ、今度程ニ実ニ苦行いたし候事ハ年來無之、所謂去年貧不若今年貧之真味ヲ自證いたし候、阿雀夫婦なども大憤勵、逸雄ハ余程得力ヲ覺、鶴も中々／＼旧阿雀ニ非ス、中々難当俊處出來候、最不思議之事也、以為如何古徳云、人生何事最苦眼前不明大事最苦ト、突然々々、大丈夫為大事因縁出世一番スト、此事果如何、看得幸ニ崎陽ニ善應老和尚アリ、試ニ何ニ而モ一公案ヲ授リ參得シ、所見ヲ呈入室ヲいたし可申候、必別格進歩アルモノ也、男兒一タビ此況味ヲ不知ハ生涯之樂ヲ不知、生テモ無益也、如何々々、考朽<sup>コウク</sup>など幸得洪川老漢ヨリ是非／＼一回透過セサレハ弗措ト老腕ヲ扼申候、呵々々

○三宅憲章<sup>ノリキ</sup>へ書可遣、いまた返辨なく、小川高橋も同様、実ニズルキ奴等ニ而仕方なく候、毎度憲章ヲ督責スレトモ、尹も病症ニ而他

出難出來よし、改歲來ハ未一訪、雪泥三尺健吉なども往來ニ苦み候故也、谷武馬もチト關係のよし、近日いつれにも健吉遣し可相弁と存候、資本金も其俣ニさし置、其中利四十円計有之候ハ、早遣錢にいたし候、入費ハ次第二嵩み、中々六かしく覺候、我等近日益壯健、餘り告暇なく毎日出勤いたし候、併シ苦寒中益不堪老衰、弟チト暇アリ候へハ近傍探梅ニ出掛可申候、明日ハ又々洪川老納兩忘社會ニ而、朝分出掛ル筈也、碧巖ノ好古本崎陽ニ有之候ハ、求越可被申候、善應老漢などへ相談可致候、東京ニハ都テ無之、洪川提唱故也、以可想像也、書到此晚餐ヲ報來、即擱筆、不乙々々

一月念日午後四時

慥齋老人

豚犬等

正治殿

お清との

尚々布師田屋敷ハ賣却いたし候へとも、番号等左の通也、為心得申遣候

高智縣第七大區一小區土佐郡布師田村百七十四番屋敷

奥宮正治

嘉永四年亥十一月十三日出生

備後高山氏江書通之事致承知候、後便ニ遣可申候、養女ニ相成候へハ高山ハ先第一之親戚ト相成可申候

かね井も隨分有付宜、併シ多人数之中チト六かしき由、近所故毎々参り候、先安堵可致候

## ○ [朱書] (明治九年二月四日付)

客月廿日同廿八日両度之書相達嬉披見いたし候、雪後寒威激烈之處、兩人とも無事、珍重々々、爰元老朽始一同依旧瓦完安意可致候、先月十日比雪頻降、此節雪泥途中没人脚馬足車も難行、殆難洪也、崎陽如何、存外温暖二候哉、東京雪ハ近年無之事と皆々申候、右二付、我等もちと疝癢一兩日ハ腰痛と変し、五六日計引籠居候、併格別之こともなく、依疾得閑、亦不惡位之事省心可有之候、尾崎氏江文通と存認置候處江尹上京と聞止メ候、近日親訪委細直話可致、それ今内潮江弟参り詳話可致と申居候、去年出足之節之約束も有之、よも否とハ申間敷と存候、併進級出来候ハ、二三月計ハ遅くテモ不苦候、其方帰京六かしく候へハ清を一旦歸し候よし、至極尤二候へども可相成ハ一所に帰京可致、四五月比はいづれ歸計ヤもくろみ可申候、梅雨比之海上ヲ可期と存候、如何々々 ○備後へも未書通近日可遣、併崎陽へハ書通有之候哉、布山宅はなく候へども、先之番号ハ先書ニ申遣候通にて宜と存候 ○近来益風袋入彼資本へも手を着居候、今二好奇策も無之空しく置候、積て使ハ山も崩ル、愚計ニ落候事、遺憾々々、田内も宮村跡江引越筈、六日に引移筈也、夫二付テも四十円計用立、何二付テモ入費沙汰、彼三宅小川等之金円も今に埒明不申、三宅江は崎陽分も一書遣可申候、甚迷惑之段三宅ハ受人二而もなく候へども、口次故、是を相人にいたすより外無之候、如何々々 ○かね井もチト例の持疾ニ而兩三日分滯留、是もとかく家を別に不設は多人数中ニ而心配と申事、小キ家ニ而も建遣さゞれハ事足ましくと存候、いづれ四五十円ハ又費可申候

○時勢ハ新聞上に讓略之、併シ征韓ハ是非可有之勢ニ至り候、崎陽ハ餘程騒然と存候、未識能果否政府益壓字ノ様子、新聞記者ナドハ皆々罰金入獄ニ相成候、万国新聞ニテ、チトモ有之候よし也、如何々々 ○省中ハ先穩便也、大久保少輔何も思わくなし之愚老人、併類ニ知人を登庸スル様子也、俄ニ進級多く有之候、河口も一級進九等ニ相成候 ○河口あとの家も未賣貸いづれ四円なれば借人有之候へども、序に打賣申度百七十八円なれば拂可申と存候 ○潮弟も官途見付なきニ付帰縣と申居、類ニ抑留いたし候へども、留守沢田婆氣遣になり候よしニ而、是非帰ねはならぬと申事、甚痛心いたし候、岩崎も丁野も頼ガヒナク、今一度尾崎江依頼可致と存居候、いかにも亦無覺東事也、新入官ハ実ニ六かしき世ニ相成候故、大抵なれば辞字ハ云はぬ事と存候、只今スルガ臺ニ而小供ニ授業ハ甚閑暇ニ而、朝も八時過午後仕舞也、二十円ハ随分好給にハ有之候へども、家人を引候ニハ不足故、縣ニテ十五円か遙ニ勝ルト申居候 ○洪川禪甚盛、田内など大張込ニテ一二公案を了得せしと云、此間一日ニハユシマ大教院開庭式、雪後奇寒中聴衆も百有余人、其中居士組二十人計也、山岡鳥尾自得など其撰也、潮弟も稍禅味を喫し大喜、此行只此一事所得と云々、如何々々、崎陽には此空氣なきよし、聖福寺之善應老衲も相應に得力家也、必試ニ一案ヲ受見解ニテモ一應接可致候、田内夫婦ニ劣テモ心外ニアラズヤ、如何々々、匆々不乙

二月四日

正治殿  
お清との

先夜雪中惣不聞鐘聲

大雪に埋みや果し間近なる

上野の鐘の音も聞えず

存齋

豚犬等

密話承り申候、征韓首尾能マトマリ、暴徒大アテチガヒ、呵々、併天幸亦人功ニ存候、中山山本克など旧縣書生論違ひ申候よし也 ○上野掛茶屋取拂博物館ニなると云々、今春之花ハ俗塵を脱候と相樂申候 ○書画崎陽流行のよし、都下ニ而も随分流行也、禪風も益盛大也、人間ハ何そ一番面白事なくては暮付カヌもの也、能く安心立命之處可心得也、書到此報晚餐、擱毫、匆々不堪馳神

三月十一日

榎翁

存齋

豚児

○ 「朱書」(明治九年三月十一日付)

三月三日書同八日達嬉敷致披閱候、春寒料峭之處兩人とも無恙依旧候よし、珍重々々、爰元老朽皆々依然瓦完罷在候、休意可有之候、陳者婦省一件今日北忠江參候處、委細引請呉大木卿江直話可致と申候、必不悪取計可申候、暫時可相待候、尾崎生は依頼いたし候へども、何分グズく、北忠ハ遙ニ宜候、来月末の五月初江掛必可運と存候

○小田縣も岡山縣江合併旁以今暫ゴタツキ候よし、是亦暫時可相待、健吉必ヌカリ申間敷候、中沢未亡人も安産男子出生之よし、母子肥立候趣、珍重く ○資金貸付候一方ハ漸皆済、今一方三宅未相済、併必近日可相運と存候 ○潮弟も七日内務省十等中録ニ拜命、職務掛江日勤、是ハ全北忠之働ニ而、今日も弟豚児三人連ニ而礼旁参り、其元之事も頼申候、田内も頼置候、解事人大ニ愉快且機

正治殿

お清どの

尚々時候自愛專一、其地ハ温暖ノよし、東京ハ餘寒未衰也

○ 「朱書」(明治九年三月廿六日付)

付一書郵便候、稍春色早櫻之候、先以其元等愈無異と、珍重々々、爰元老朽始皆々依旧瓦全省意可有之候 ○過日尾崎氏出足、廿二日と申事ニ付、廿一日午後直訪之處、早発軻後と申事、少々品物等可相贈と存居候へとも、遺憾々々、其前日尾生参り委細縷々承り候處、亦有一理候ニ付任其意候、とかく進級後辞ナリトモ、何ナリトモ、適宜可取極併北代生江托置候一事、尚今少し見合可申、存外大木ノ下小木育養有之かも不可知候、呵々 ○春色和風ニ乘し、頻ニ散歩兄弟唱和、何より之一樂也、過日杵川梅見一日諸處逍遙、且得

## 一絶

纔隔江村遠市塵、微風香暖小羅春、咲吾郊外無東道、只識梅花不識人

是日或人誘余約訪梅園主人而背約故及

## 正治殿

お清どの

尚々春寒不定氣候隨時自重可致候、此間中書信不来、待兼候

## 臥龍梅を

呼起す人もなしとや梅の花　いく春かくて臥て咲らむ

憐評くく

○備後へも今二不遣書、婚儀定り候へハ可遣と存候、如何々々　○朝鮮條約二付、チトグスくも有之よし、如何々々、今ニ始メヌ世態人情実ニ困タモノ也、それハそれと崎陽春事如何、例之書畫會如何、此間散步序得一書幅、清人梁詩正号山トアリ、云乾隆帝之書ノ師也ト、崎陽ニ而ハ能知ル人アルベシ、詮議スベシ、墨梅軸は八明人ト云、錢仁夫字士弘號東湖居士常熟人官至膳部員外郎畫山水竹石有逸云々、伊川院榮信之添書アリ、是モ詮議スベシ、一畫者ニ為見候處、明末人ナルベシト云、右両幅ハ是迄家ニ無之、随分秘藏すべしと存候　○上野山内仮茶屋取拂博物館ト相成候、今春観花ハ却而不俗遊人可多ト申候、毎々花下逍遙可致と存候、書到此有來客、即擱毫、不一々々

三月廿六日

健翁

犬豚

等

齋藤田内皆無事也

潮江も四月中ニハ家内來筈

○ [朱書] (明治九年四月「欠字」日付)

本月念三之書同卅日達、反覆致披見候、花候駘蕩之處、兩人不相替瓦完之よし、珍重々々、爰元考朽依然一家瓦全省念可然候、此兩三日騒暖、上野櫻皆發、昨日ハ半日逍遙相樂申候、崎陽花候如何、都下最覺早　○尾崎氏も此節ハ着帆と存候、委細直話可承候付、尾生口頭之通今暫く帰省可見合、其中大木辺藥功相見可申候　○花卉三葉就中竹稍得趣候、書畫崎陽不廉のよし、却而都下ニ廉物可有之、無益ニ不可費、家内ヲ持候へハ存外ニ儉吝ニナルモノ也、如何々々　○朝鮮も無事濟、例之激書生大ニ脱胆と、一笑く、併言會社も亦不為無咎也、如何々々、世ノ中次第ニ六かしかるへく、併かの資本も武田も今以不可奈何、困却々々、妙策アラハ可申越候、帰京ハ是非尾生之歸リヲ俟テ決スベシ、どふか策付可申候　○二健不相替懶怠、困却く、併理屈ハ大そふ上進、口ハ家法也、孰レ口才ハテントヤスキモノ也、可慎く　○昨日上野散步ニテいつも世におくれ勝なる我身にも　ことしハ花にさきかけをする書到此微醉稍醒欲眠、即擱筆耳

健翁

豚兒

正治

お清との

○ 「朱書」(明治九年五月八日付)

(前文闕) 有之候、客月十四日後ハ絶無信書と存候中、昨日得好音相喜ひ候、昨日夕休暇宿直ニ而今朝退朝、両三日雨打続候處新晴、今日ハ上野御遊覧之よし之處、未調處有之哉、明日ニ御延期ト相成候、公園之清潔所謂餅を轉し候ても宜と云々、今朝ハ潮江渾家も皆々と打連立散步、喫驚ノよし也、子供ニ三度轉ビシト云、一咲く、○過日火災氣遣よし尤也、幸ニ無風といへとも、さし向ニ而纔に二丁ニ不足、皆々一同喫一驚候、其後東京裁判所火災有之、爾後ハ先穩か也、新聞上ニ時々一見可致客中見新聞始其効ヲ覺フト云々、物事皆然經実地始知其趣談、豈容易ナランヤ ○近來崎陽書畫流行之よし、先月念九ハ守山湘帆宅ニ而雅會之よし、尹ハ屈指之畫人、定而風流人聚首、雅致不堪想像候、此間両國中村樓ニ而も有之、礼弟ハ同僚ト参り候よし、例之大雜沓ニ而、弟などハ呆々々面白ト云々、我等も欲行不果、聴劇音帰候、先日竹逸分散ニ而、四円計之品ヲ調帰候、程子兄弟之内伊川ト云替アリ、又明人書画……晋陳成約明道カト云人モアリ俾生甫豊手拜識トアリ、山水ハ坦亭ト云清初人ト云々、皆古キ蟲喰也、新井白石之詩八首全幅ニ有之、いかにも面白、併シ價不廉五円と云ニ怕れ得不求候、其外蔣濤ト云山水大幅極品也、二十五円云々、馬鹿く敷ト存候、三十円計抛却スレハ六十円之品有之よし、甚食氣熟考之上、次便ニ事ニ寄可差贈と存候、帰省一條も未決策云々、いづれ暑中休暇前か宜一先帰省可然候、又々策ハとふとも

可致、北忠も此度之御先供ニ而、今月中旬より奥羽へ發途ト云々、岡内か又佐々木辺へテモ依頼可致かと存居候、其中北代へも一寸参り直話可致とハ存候へとも、發途前ニテハ如何と存候 ○尾崎氏之義理も一概ニ不及立事也、同氏之女類ニ勉強論語聽講早八併ニ至り候、質問振中く女兒ニハ稀代ナリ、晴湖ニ書ヲ学通学之序ニ隔日ニ参り候、尾崎氏江宜可申候、書状ハ例之老懶、可謝々々 ○備後一件も婚儀届有之候ハ、早速書通可致、旧縣へ之届本籍之事弘瀬丈八へ頼可遣候、猶健吉ト打合置至急可申遣候、今日健吉未帰宅 ○謙之も未グズく、併稍進歩らしく候 ○彼資本貸付之一件も未着手、いづれ其元帰省ヲ待可相謀候、如何々々、健吉「虫食いカ」女ハ繁多故世話ウルサガリ候、三宅モンレナリ困却々々、実ニ千金近キ実貨ヲ空積ハ愚ノ至也、亦あしくシテ本も子もナクスレハ猶更也、如何々々、書到此報晚餐、擱毫、不一々々

五月八日新霽微温

懺翁

正治殿

お清との

尚々潮江齋藤田内いづれも依旧安心可致候、毎々一堂聚首隨分大勢也、賑々

○ 「朱書」(明治九年五月廿一日)

爾後杳無消息、如何々々、新鵬新樹之候愈御無事と、珍重々々、爰マヤ元考朽始皆々無異瓦全省念有之候、陳本月十三日先考御忌日ニ付、祖先靈祭いたし、両婿来助、立派ニ祭奠いたし候、伯母も丁度十回

忌二付、一所二合祭いたし候 ○兼井も先日未血症ニ而煩候處、此節全癒、年来之鬱悒病ヲ此度ハ一洗可致と却而喜候、阿鶴ハ大息災、類ニ禪味ニ耽申候、大分得力有様子、中々我等など不及所タリ ○先日浅草お蝶之爺と申もの来云、お蝶之事二付備後行ト、詳なるは不知候へとも、何かお蝶身前之事らしく候、長崎へも行様ニ申候ニ付、丈夫ハ留置候、為心得一通り申通候也 ○書畫今ニ盛之よし三十金計郵送云々致承知候、併シ買書畫テ小利ヲ求ムルハ不若、辛抱シテ早帰省せんニハ如何々々、卅円ハ我半月給ニ不足、豈於汝惜之哉 ○弥々六月下旬迄ニ帰省すれはさるへし ○北忠も御先路調ニ付、奥辺江とく出途いたし候 ○一千金ニ近き金円ヲ空しく只置候ハ愚中之愚ト云々、無違々々雖然本も粉もナクシテハ猶愚中之至愚ナリ、如何々々、次便必可報知候、三菱商社江預ケ候策ハ如何、弟ニ為相談可申敷、如何 ○千葉縣ニ同姓之者有之廿三日ニ来筈、奥宮國次ト云モノ也、省ニテ一見、いつれ祖ノ血脈ニ違なき由一見後可申遣候、書到此忽有用事、筆ヲ擱ク 恐惶謹言

五月廿一日 慥齋 ミナ々

正治殿

お清どの

酔後

再言、布山留守ノ戸籍主ハ弘瀬陽洲江相頼遣候

高知縣第七大區一小區布師田村弘瀬陽洲

○近日政府モ格別説ナシ、委細見新聞上 ○宅會稍盛ナル機アリ、

莊子傳習神代紀三會二七八人出席セリ、亦足以慰慰老懷也、近日詩歌ナシ

いつしかに古葉しくれて白雲の

上野の花ハ緑さしけり

老らくのね耳ニ遠きほと、きす

夢か現か暁の空

○ 「朱書」(明治九年五月廿九日付)

阿鶴ハ修行中ニテ無音也、お清へ宜ト申出候、兼井今同断、二婿皆無事潮江同シ、皆々宜申ト云々

本月十九日之書、同念六相達反復致披閱候、清和薰風候先以兩人無異之由、珍重々々、爰元老朽瓦完奉職皆々同様、右様省念可有之候、都下先静平過日ハ類ニ火災有之、近日ハ寂然タリ、只々公園騷キ浅草も取除之沙汰弥決着候よし、無産之窮民実ニ可憐生上野ハ丘陵ニ而候へとも、浅草ハ平地植物せしとて何益アラン、目前ニ二三千戸之難渋見るに不忍也、呵々、是も流行病ノ所使然也、無奈何○該地も上等裁判煉瓦ニナリ候よし、流行病之傳染不可免、併シ誰そ言者ハナキカ、其位之事争拒ノ不出来ハヘゲタレノ揃ト云ヘシ、如何々々、五万円之無惰費ヲ何ソ有益事ニ施サハ屹度有益と例之杞憂、呵々、痛笑々々、三潜佐賀合併ニ付、少々洵々之よし、如何々々、高知もとふかブスカサ之よし、詳ナル事未聞、諸方六かしき時節到来也、竟ニ鷹縣之的中ニ落可申候、長大息々々、併シ真開化ハ該縣第一ニ可至ト、突然々々、其中ニ地震数々あるべ



し、予等老而不能見、遺憾く、崎陽宮川令不ノ字ノ由諷セラレテ辞表、云々、其筭ナカラ驚タリ、其後ハ外務中令ト云よし、誰ナルヤ縣廳中人物少キよし、無好人三字ハ有道者之言ニ非ず、如何、却而無眼子当面失却人物モノ、如何々々、権参河内トヤラ稍可話漢ノ由、能く勘破スヘシ、市中玉ツキ流行云々、横濱辺モ同断、皆洋人より流行放飯□セツ齒決ヲ問事不珍ナリ、習生ノ服セサルモ亦宜哉  
○晝會依然盛ノ由、過日守山ノ一會該縣ノ文人集マリ候よし、好古書畫一見不堪想像候、就中劉基書卷垂涎三尺 ○扱彼古書畫買ノ一件先考中二候、明清書畫却而廉ト云々、先日頻ニ書畫癖起リ、無益ニ散財いたし、まだ其癖未已蔣靄山水氣ニカ、リ申候、廿五円ト云、十二三円ナレハト企首いたし候、如何々々 ○帰省暑中休暇ニ決策之よし、甚好々々、夫ニ付佐々木松岡辺周旋致承知候、松岡ハ如何、不可知、佐々木江ハ近日先日之礼旁可叩訪と存候  
○福山養女送籍一件も健吉周旋いたし相濟候ニ付、此上ハ結婚ニテ可宜ト申事也 ○三宅金円も今ニ不埒明困却セリ、谷生帰京後ト押移居候、去年十月今迄違約金迄ニテモ餘程可有之、本金四十円之丸損ニ不成様いたし度もの也、如何々々、彼資本モ先夫ナリニ束閣無策之甚キ也、就テハ三菱江デモ預ケ可然ト兄弟相談いたし候、以爲如何、今之中ニ邸地ヲ求買も如何、借家ヲ貸か一番ト申事也、トテモ今迄置シモノナレハ其方帰省後一策可有之か、如何々々、只置ノ愚ハ実然丸損ハ亦愚中之愚也、我儕ハ個裏之計ハ実ニ槌也 ○新緑杜鵑中ヲ散歩、極保養良空氣ハ上野二十分也、過日空氣テ計ル處ヲ見テ例之口吟

やよ鴉うの真似をして溺る、な 黒きは同し姿なれども

決テ陋習家之口吻ニ似タルヲ以擯斥スルナカレ、個裏大意味以為如何 ○過日来又々於湯島撰心有之、田内夫妻ナト大二張込、逸雄ハ早餘程透透いたし候よし、洪川も大二賞シ候、鶴児も存外宿縁アルニ似タリ、過日も又一見所ヲ開キシ由、隻手公案ヲ餘程透過セリ、今ニテハ予不及也、予輩ハどふも大早計ニ而、會解ニ流レ真実見解不出來候、予兄弟皆然リ、此事兒女ニ不及ハ可愧死也、夫ニ付兼井大妬心殆如狂、又々是も昨夕於身滌中一発悟有之よし、急走来歡喜くト実ニ不思議之事也、個事ハ帰省後直話ト存候へども、不堪喜故先漏泄いたし候、昨日ハ中江篤助コレハ、七大隅春吉弘田兼二モ來参、受公案段々洋学生ニ波及せしも一笑くく、何分帰省迄ニ聖福寺之老衲に一相見、何テモ理屈ヲ以一撈可致、是一生之大事也、至囑々々、書到此報晚餐松魚焼切出來タリト云、又欲一酌擱毫、匆々

五月念九昨夜雷雨、今朝新晴

健翁

犬豚等

正治殿

お清との

再白不正氣候切ニ自重可然候、尾崎女隔日必來聽講、此節ハ論語里仁第四ニ至リ百人首ヲ附講ス、書畫亦妙也、尾崎生ニ宣傳致可然候、捨も御蔭ニ而チト憤発ス、只羞恥家ニテ困却也

○ [朱書] (明治九年六月九日付)

本月一日書早速反復致披見候、梅霧前候而人益無事之よし、珍重々々、爰元老朽始皆々依然完瓦消念可然候、扱帰省弥七月七日比ニ決策之よし、最佳々々、然ニ法律学ニ付段々召上セ之よし、岩崎生辺江周旋致承知候、是ハ随分可行かと存候、先蒲生辺へも話可申候、如何々々、今日実ニ在遠隔時ニあらず片時も早帰すへし、然ニ暑中休暇今年ハ無ナト云説アリ、如何々々、予ハ決而不信也、何トナレハ御東巡有レハ也、此中不可言、呵々々、今日之報知新聞可見也 ○省中も依然不振、予上ニ後醍院モ先達而辞職、八等ハ以予為首、次ハ小中村也、小中村ヲ奏任ニ申上度と存候、如何々々、帰後可熟談 ○書畫購一件も二十円計ナレハ宜か後便可遣其中好品ヲ詮議置へシ、不必商法トモ可慰殘年也、碓陽不可再来云々、実然々々、骨董癖煎茶具如何、唐線香小香炉等見当り候へハ可購併不必也、書籍ハナキヤ、近日漢籍大分流行不廉也、先年之過チ悔不及、少々尾崎等ニ借リテナリトモ可事足、留守江拂候へハ為替も同様也、如何々々 ○近日禅味もチト厭風也、併何か一見所出来候様ニハ覚候、善應老衲へ傳致可致候、帰迄ニハ是非相見思様説破スヘシ、不在益彼必有益我也 ○皓臺寺ノ天馬賦ハ一見候哉、双鉤出来レハ二三葉ニ而もスヘシ、実ニ稀品也 ○聖福寺東坡竹一見否 ○此度小栗須香頂支那江真宗ヲ建立と出掛よし、大山必當既ニ一万円餘も集ルト云々、それに付崎陽ニテハ説ナキヤ、呵々々 ○何トカシテ支那一遊妄念難消候、如何々々 ○金円一件今以其俣待帰省可果と存候、いろ／＼話多候へども他出掛匆忙如此、尚後鴻ニ委候、不乙々々

六月九日驟雨俄然雷鳴数声

慥翁

存齋

犬豚等

正治殿

お清どの

二白不正候隨時自愛可然候、備後養女願ハ出セシガ未済よし、浅草お蝶一件其後何等ノ話モナシ、多分無何事済候事と存候、勿論取アヒ不申候

何用青山避世譚。事書纔庇是吾家。如今證得蕉翁句。浅草鐘声上野花。

いつしかに青葉の影と成に鳧 上野の丘の白雲

○ [朱書] (明治九年六月十日付)

爾後御疎濶打過申候、益御清勝御奉職奉欣然候、近來大ニ御無音失敬御海涵可被成候、陳者豚兒正治今以崎陽滞在、実者老迂近來益老衰倦勤引入勝ニ而、何卒豚兒在側と欲し候へとも、先一旦遠役も書生磨礪ニ可宜と奉命勉強罷在候、然ニ此度粗承り候處、法律調とやらニ而谷武馬なども御呼返し之由、豚犬も御存之通之迂物ニ候へども、法律ハ近來少々研究於崎陽も頻ニ勉強いたし候由、何卒此機會ニ都下奉職ハ相成間敷哉、実ハ尾崎氏江最初より其約束ニ而遣し候處、温言やら因循やらニ而今以如此、老僕殆困却外ならず、貴丈を御依頼申候、今日ハ健吉さし出候ニ付、縷々痴情ハ渠か口頭ニ付申候、宜御聞取被下度、情溢辞迫不能尽万一、勿々、いづれ近日拜趨

万緒可申解候、頓首再拜

六月十日

岩崎盟臺

侍史

正由

○〔朱書〕（明治九年九月十日付）

兩度之書相達致披見候、殘炎未老處愈無異奉職之由、珍重々々、爰元老朽始皆々依然瓦完省念可有之候、陳者着後先依然彼帰省一條も未運よし、とかく休暇中故と察候、いつれ本月十三四日比二相成候へハ可知よし、我等も又々少々暑傷二而下利有之候處、頃日大二快方、決而氣遣申間敷候、併此儀を申「欠字」候ても少しも早く帰省可然、來月初旬には是非とも帰京可相成歟、如何々々、尾崎氏も存外運あしく哉、それよりは中沢生蒲生辺か却而可宜、近日蒲生へも參り可申候と相含候、先達而之尾崎書中ハ多分其事と察候、我等への書中にも粗有之候、兎角因循家と存候 ○國憲定立ニ相成候由、元老院二而も人入用と申事いづれ帰省之上ハどふとも可相成候、一昨夜も宮崎生參りいろく話聞候、機密ハ不能筆紙候 ○崎陽暑氣如何、都下ハ頃來甚しく<sup>四度</sup><sup>九十三</sup>夜來騒雨輕雷、今朝ハ爽氣可掬、北窓寄傲堪読書、是日弘田生書生ヲ引テ來、品行論<sup>ルズ</sup><sup>ス</sup>ヲ講スル筈、後ニテ何ソ經ヲ講呉候様頼ニ付、何ぞ演説可致と相考候、福沢書生等也、亦可樂く ○兼并先頃今久しく相煩らひ、漸先日一度歸り又々來タリ居タリいたし居候、氣遣ハなく例の子宮病也、其餘ハ皆々大息災、潮江齋藤田内一家皆平安也、先是一家之樂事可慰老懷

也 ○先頃布師田弘瀨今備後福山之事未タ廻ラサルよし申來、其後ハ必可廻と存候か、其後何とも不申來候 ○廢縣後如何、裁判所も自ら減可申歟、如何々々、餘縷如海山候へども餘之書状長箋ニ付我等ハ略申候、草々不乙々々  
九月十日午前十時陰微涼

榎翁

豚犬等

正治殿

尚々時候隨時自愛可然候

○〔朱書〕（明治九年九月十六日付）

日光行、別紙サツト清書、林雲達カ誰人ニテモ評ヲ乞可申韵法等詳ニ請教  
本月八日書一昨十四日達致披見候、稍涼氣相催候處、愈無異奉職、珍重々々、爰元老朽始皆々依然瓦完罷在候間、休神可然候、陳帰京策も未可知よし、大二焦慮ニ不堪候、蒲生中沢辺へ老迂今又々促シ可申候、併休暇中故多分頃來ハ事運可申と想像いたし候、都下先依然其中国憲沙汰定而新聞に而も見可申候、是は中く大事件、どぶぞ例之經卒ナキ様と祈申候、文教廢シノ説も中外評論ニ出候、是も例之塘説決而不足驚也、省中未會議も不建立、いつれ今月末今又々可建立催促いたし懸ケ候、甚等閑ニ而退屈ニ不堪候 ○宅會稍盛ニ赴キ先日日曜ニハ弘田生例之書生ヲ率來、品行論を演講、老迂ニも

大學を講吳候様申に付、例之信之拈出講後チク／＼談話有之、隨分可樂候演說筆記アリ。○湯島も稍弛り候、明日ハ兩忘會と申事出掛可申候、併又々宅ニ而書生へ對シ強聒スルモ面白と存候。○久早又々秋霖ト變シ、今日ハ雨窓不堪徒然

世の中ハかくそ有ける照る／＼と さはきし人の降る／＼といふ  
白雲深矣不若早帰日光行長篇七古十九韵、先日落成、次ニ示可申候  
林雲達辺江見せ可申候、今日も來客匆匆中返書迄、勿々期次便候  
九月十六日雨蕭然冷氣欲襲衣

慥齋

豚兒等

正治殿

尾崎氏江別書不遣宜可申候、是非帰省ヲ促事愚父分頻也ト可申嬢頻ニ出精也、近日ハ古文を聴講皆ノ會へも出掛ケ候、中／＼感心也

(別紙)

日光行

君不見日光湖水四十八。一々作瀑噴晴雪。九夏三伏渾不知。一入此中忽換骨。」又不見縹緲樓臺八十四。一々傑構極整潔、道説不見日光莫言傑構。我每聞之神飛越。」今年炎旱真所稀、雲漢水竭驕老□、稻田為灰平澤焦。三千萬人悉病渴。」我來山中作汗漫。白髮老巫迎客説。某丘某壁坐神宮。金碧閃閃眼生纈。」舟梯朱檻欲朝天。但見雲霧明復滅。創闢者誰勝道師。山鬼秘縱猶忌泄。」前空海後天海。益開禪場設列刹。赤裸滌垢浴禪湖。白衣進香朝鬢髮。」山一名一自闕宮

遷靈柩。山民至今仰餘烈。嗟乎人世何處無仙境。洞口纔隔天地別。寄言滿城苦熱人。盍來此中避炎熱。浴湖觀瀑日逍遙。仙家金丹別無訣。煙霞痼疾雖難醫。四百四病盡蟬脫。